夢を持てない男も異世界から来るそうですよ？

shoshohei

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

『夢』とはなんだろう。

時に呪い。

時に希望。

時に熱くなれるもの。

時に切なくなるもの。

様々な『夢』の答えを持つ少年少女たちは、可能性の収束点にその『夢』を見て招かれる。

しかしただ一人、誰かの夢を背負った男は、意思に関わらずその世界へと呼び出される。
人か。人ならざる者か。
僅かながらに残された命で、男は夢に呪われるのか。夢に希望を見出すのか。
これは、そういう世界（ほし）の物語。

■　■　■　■　■　■　■　■

仮面ライダー５５５と問題児が異世界から来るそうですよ？　のクロスオーバーです！
ついついファイズのタツくんやオルフェノクが好きだったりして始めちゃった作品でございます！
ちなみにこのタツくんは小説版仮面ライダー５５５のタツくんを基に書かせて頂いております。
故にＴＶ版の設定はあまり反映されておりません、あしからず。

後この小説のたっくんは変身しません！　小説版の展開の都合上、ライダーズギアは破壊されております。あしからず。

また、この作品は作者の妄想の塊でもある小説なので、色々独自解釈や独自設定が混ざっている部分がございます。ご注意ください！

批判や感想、なんでもござれ！『あれ？　ここおかしいな』と想ったときはお伝えください！　出来る限り直していきたいと思います!!

目次

プロローグ ―― 1
夢の始まり
灰色からの脱却 ―― 13
罪を背負った灰 ―― 30
罪深き森の王者 ―― 51
渦巻く疑念は灰色で ―― 78
天照す白陽 ―― 96
刻まれし己が恩恵 ―― 117
Community with No name ―― 141

プロローグ

ここで一つの、ある世界の話をしよう。

とある時代、とある国。

どこぞの島国に酷似した民主国家の水面下で起きた、人と人ならざる者の闘いがあった。確かに存在していた。

人ならざる者は、名をオルフェノクという種族だった。

人類の進化形態などと囁かれている、全身を隈無く灰色に染まった、まさしく異形と呼ぶに相応しい身なりをした生き物たちである。

彼らは人間が一度死んだときに、ごく稀に死から生還してその姿形、力を得る。

死の淵から生還し、そして生まれ変わった彼らはどういうわけか、人間を襲う。それは本能からの命令、心の中から呼びかける『声』が聞こえるのだ。

本能に従う彼らは、人間を襲い、生まれ変わり得た力によって同胞を生み出していく。襲われた人間は、オルフェノクに変わっていくのである。

だが、その力に耐えられる者はごく僅か。実質は殺人行為に等しい行為である。注がれた彼らの力に、人体が耐えられないのだから。

彼らは短命である。その超常の進化を遂げるも、人の身がそれに耐えられないが故に。

彼らは他を凌駕する生存本能の持ち主である。先行き短し命を持つが故に。

オルフェノクのその行動は陰で密やかに、国の軍事機密を握る者たちにさえ気付かれぬほどに行われていた。しかしある時、人間にその存在を感づかれるという事態が発生してしまった。

当然ながら危惧した国の軍の指揮を執る者は、自らの国の軍事力を持ってしてこれを排除しようとした。降りかかる火の粉を、自らの力で排するがために。

人間とオルフェノクの闘争。『生きたい』と願う心が生んだ醜い戦争だ。それが狼煙を上げたのだ。

しかし、どうにも世の中では異常で、例外というものは存在するものだ。

オルフェノクが多く誕生する中、一部のオルフェノクは『人間を襲う』という行為を忌避した。オルフェノクになった者の大半はその力に溺れ、人間性を喪失して人を襲うにも関わらず、彼らは人の心を失わずに『人』であろうとした。

ただただ、人間でいたいと願った。ただそれだけ。

いや、『人』でなくなることに恐怖したのだ。

陽だまりから真っ暗闇へと歩き出すことに恐怖したのだ。

人間と共存を望む者、または自分は人間だと訴えかけ、本能に抗い、オルフェノクとしてではなく人間として生きることを望んだのだ。

当然ながら、人間を劣等種として見下して、自身の種族を増やす駒にしか見ていない大半のオルフェノクはこの一部の者の思想を否定した。お前たちは人間達は違うのだと、人間達とは分かり合えぬのだと説得を持ちかけたが、やはり彼らは人として生きることをやめなかった。

その考えに至れぬ人間を襲うオルフェノクは、その者たちを『裏切り者』として襲いかかり始めた。

反抗したオルフェノク達も、その攻撃にあらがった。オルフェノク同士達の闘いが始まったのだ。

反抗したオルフェノク達は、やはり劣勢に立たされた。それも考えれば当然である。

同胞からは『裏切り者』として殺されかけ。

かつての同胞である人間からは『化け物』と罵られまた命を取られかける。

人間の中には彼らを認めて共に暮らそうとする者もいたが、ソレを認めぬ周囲に迫害され、またも殺されそうになった。

オルフェノクにも追われ、人間にも追われて彼らは苦しんで苦しんで苦しんだ。

その行動を繰り返すうちに、彼らは自身の正体を隠して生きていくようになった。

人間として生きていた家族にも、友人にも、そのほかの周囲の人々にも自身が灰色の化け物だと知られぬように細々と生きていったのである。

その者たちの中で。人間にも成り切れず、オルフェノクにも成れない者たちの中で。

本能に抗ったオルフェノクの更にごく一部、人をオルフェノクから守るオルフェノクが現れた。

罵倒され、石を投げつけられ、銃弾を撃たれ、危うく殺されかかっても。その者たちはオルフェノクの力で人を守ろうとした。

どれだけ姿形が変わろうと、どれだけ人智を超えた力を得ようとも、どれだけ傷つけられ殺されかけようとも、必死に本能に抗って人々を守ることを選んだのだ。

そして。

ここに、どこまでも人間であろうと願い、闘い続ける男がいた。

■　■　■　■　■　■　■　■

白い。

真っ白な結晶が、数多くパラパラと空から舞い落ちる。

天気予報では今日は多く雪が降ると言っていたのだから、速く帰らねばならない。

乾巧（いぬいたくみ）は内心で少しばかり焦りながら、自身に振りかかった雪と灰を手で取り払った。彼は眼前に広がる灰の山を悲しげに見つめた後に、体全体に襲いかかる疲労感を鬱陶しく思いながら重い足取りで帰路へと着く。どうやら人目には付いていないようだから、さして問題はないだろう。

「……くそっ、今日に限ってなんであんな手強そうなのがうじゃうじゃ襲ってくんだよ」

鬱陶しそうに呟きながら彼は灰が積もった公園を後にするために踵を返す。

かつての仲間に何も告げずに、一方的な別れを経て三カ月。

人を襲うオルフェノク、または巧を『裏切り者』と罵って襲ってくるオルフェノクの数は一方的に減らなかった。今日も今日とてどこから降って湧いて出たのか、数体ほどの手練れのオルフェノク達を、どうにかこうして灰に帰すことができた。

体全体に襲いかかる疲労感は今回は甚大な物であったのか、巧は肩で息をしながら近

くのベンチに座り込む。
今回の相手は恐ろしく強かった。しかもそれが三体ときた。張り切り過ぎである。
今は有無を言わぬ灰となったオルフェノク達に少しばかり悪態を突きながら、巧は荒い呼吸を繰り返して空を見上げる。

アイツらにこんなとこ見られたら、なんて言うかな。

灰色の空を見上げながら、巧は回想に耽る。
恐らくは、かつての居場所で同じ同居人をしていた少女はきっと、鼻を鳴らして『結局人助けしてんじゃん。普段からそれぐらい素直ならいいのにね』とかなんとか言うのだろう。
その家の主である同じく同居人の男は、『タツくんはやっぱりタツくんだね！』などと言って嬉しそうに笑うのだろうか。
最近顔を見るようになった赤ん坊はどうしているだろうか。いきなり転がり込んできた『ちゅうか』が口癖のアイツは相変わらず鬱陶しいのだろうか。プレゼントとして贈られたギターはまだあるのかなどと、思い出したら切りがない。まるで間欠泉のように溢れだしてくる。

バカ。なんでこんな未練たらたらになってんだ。しっかりしろよ。

一たび思い出せば仲間の顔が溢れだしてくる自身に、巧は舌打ちがしたくなった。こんな身持ちではどうしてあの家を飛び出してきたのかが分からない。

決めたじゃないか。『アイツ』が何時か話していた、人間とオルフェノクとの共存を果たす。その『夢』を背負うと。

誓ったじゃないか。この手で命を奪った『アイツ』の分の罪まで、必ず最後まで背負って生きていくと。

揺らぎ始めた自身の意志に、巧はここまで来た理由を思い出して芯を通す。

その時に。

パラパラと雪が、鈍い灰色の空から落ちてくる。さきほど巧が屠った相手の体の色、そしてその敵の亡骸となった有無を言わぬ灰と同じ色だった。

オルフェノクは死んだら灰になる。それはオルフェノクに殺された人間も同じである。

彼らがその生命を終えるときには、体中から青白い炎を噴き出して灰へと還るのだ。

その死に方も、彼らが人間から進化したという証なのかもしれない。
パラパラと結晶を降らせ続ける雲を見ながら、巧はこう想った。

これは俺に対する当てつけかよ、クソッタレ。

思わず、この世界にいるのかどうかも分からない神様に対して内心毒を吐いた。
まあ神様がいたのならば、こんなひどい運命なんぞは作らなかったかもしれない。
人間同士が殺し合う世界などに、もしも神様がいたのならば作らなかったかもしれない。
思わず神様に対して内心山のような愚痴を零す。何時死ぬか分からないのだ。ならば今の内に沢山愚痴をこぼしていたって罰は当たるまい。

ふと、何か空から降ってくる物を感じた。
巧が再び空を見上げると、ヒラヒラと雪と共に舞い落ちる封書に視線が移った。

「……？」

奇怪な展開に思わず眉を顰めてしまう巧。そこで彼はその手紙に疑心暗鬼な視線を向けながら、自身の元に舞い落ちてくる手紙を恐る恐る掴み取る。

絶賛命の危機である彼にとってはこの手紙にかまっている暇はないのだが、ご丁寧に自分の元に堕ちてきてくれた封書が少しばかり気になるのも事実だ。

巧は手に取った封書を裏返したり、もとに戻していたりを繰り返すと、封書の裏に記された『乾巧殿』という自分の名前が記された場所に目が止まった。

それを数秒ほど悩み、疑ってます感が五割増しした瞳で巧は睨みつけた。

怪しい。どう考えたって怪しすぎる。

こんな雪空から封書が降ってきたこともそうだし、まず巧宛の手紙が偶然降ってくるなんてこともまず怪しい。というかそもそもの話、誰がこんな無愛想な塊のような男に手紙を出すのだろうか。

かつて一方的に別れを告げた仲間だって、自身の居場所を知らないはずだ。

しかし敵からの手紙だったとしても、なぜわざわざ封書を送りつけてくるのか分からない。

あまりよくないと言えるお頭で思考の渦に嵌り始めた巧は、とりあえず手紙を開いてみることにした。

敵からの宣戦布告、という可能性は低いがそれならば別に構わない。

かつての旧友からの手紙であるならばまたソレもよし、ただ届けられるはずだったそれをありがたく頂戴するだけだ。

何か拾ったものを意地汚く読むような気持ちで後ろめたさはあるが、どうせこれは自身に宛てられた手紙である。誰も文句は言うまい。言うこともできまい。

彼は手紙の封を切り、中の内容を目で追う。

そこにはこう書かれていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。その才能（ギフト）を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて、我らの〝箱庭〟に来られたし』

とまあ、何とも胡散臭い手口にお似合いな胡散臭さ一〇〇％な内容だった。

「……」

巧はそれらの文面を読み終えると、疑心暗鬼にでもなったかのような目つきでそれを

見つめた後に、ため息を一つ。

よかった。どっかの頭が可笑しなオカルト教団に属しているような奴からの手紙で。
あと誰が少年だ、もうガキじゃねえっての。いや、まだ十八だけどさ。

まさしく安堵の息を突いた巧は、用済みとなった手紙を捨ててさっさとずらかろうとする。
巧はゴミでも捨てるかのように（実際あの手紙は巧にとってはただの紙くずである）軽い手つきで封書を投げ捨てる。

その直後。

目を瞑りたくなる様な閃光が辺り一帯を照らす。
思わずその閃光のせいで、顔を腕で覆ってしまう巧。
それが失敗だったと気付いた時には、もはや手遅れだった。

雪が積もる今日この頃。

現時刻を持ってして。

人類の進化形態、オルフェノクが跋扈するこの世界から。

同胞から『裏切り者』と罵られ、命を狙われ続け、人間を守り続けるオルフェノク、乾巧は。

完全にこの世界から姿を消した。

人間よりも凄まじく限られた命を持った彼が赴くのは、全く異なる異世界である。

夢の始まり
灰色からの脱却

光に包まれ、意識が断絶された後に目を開いたところに飛び込んできたのは、どこまでも真っ青に広がる青だった。

その次に目に入ってきたのが、ふわふわと浮かぶ白い不定型な物体。頭上にはギラギラと輝く球体。

さらに感じる浮遊感、間をおかずに続く高所から叩き落とされたかのような落下する感覚。

否、今まさに叩き落とされていた。

高度四〇〇〇メートルから問答無用で地上へと向かって、乾巧は叩き落とされていたのだ。

おい、どういうことだ。こりゃどうなってんだ。

今まさに絶体絶命の危機に陥っているというのに、乾巧は嫌に冷静だった。というか

完全に拗ねていた。
眼下に広がる縮尺を見間違うほどに広がる巨大な未知の都市とかハッキリ言ってどうでもよく、巧はこんな現状にただ仏頂面を浮かべながら絶賛落下中だった。
どうやってここまで自身を送り込んだのかは知る由もないが、乾巧は不機嫌度一〇〇％の顔で送り主を見つけて一言文句を言ってやると心に誓いながら、薄い水幕が緩衝材となり、落下の吸収を抑える為に幾重にも貼られた湖へと着水した。

■　■　■　■　■　■　■　■

バシャアアアンッ、と周囲に顕在する森に木霊するほどの大きな音を立てて、仏頂面な男と一緒に落とされた3人の男女と猫一匹は、家を三軒ほど積んだらそうなるであろうほどの水柱を立てて落下した。
緩衝材が働き、無傷で落下することに成功した男女達はそれほど深くはない湖から不

快感たっぷりにそれぞれ陸へと上がって行き、服に含んだ水を絞り出す。
勿の論のこと、巧は先ほどよりも二割マシな拗ねた顔で上がってくる。
しかし彼は見知らぬ人とはつるむ気はこれっぽっちもないのか、三人の男女からは離れたところで鬱陶しそうな顔で水を絞る。

「……し、信じられないわ！　いきなり空に放り出すなんて！　下手をすれば地面に激突して即死よ!?」
「ああ、全くだ。下手をすればゲームオーバーコースだぜ、これ」
「……大丈夫？　三毛猫」

勝気そうな声音で、これまた勝気そうな顔立ちをしている正装を着た見た目十五、十六の長髪の少女。
彼女に便乗するように不満げな声を上げた、黒い学ランを着た金髪でヘッドホンをした少女と同じくらいの歳の少年。
唯一二人に同調せず、飼い猫なのか一緒に堕ちてきた猫に話しかけるスリーブレスのジャケットとショートパンツを来た茶髪でショートカットのぼんやりとした雰囲気を持つ少女。

お互いがそれぞれの感想を漏らしているも、しかし巧は彼らの誰かなどはどうでもいい。というか彼ら彼女らの存在を意識の片隅に追いやって、ただ内心でぶつくさとここへと呼び出した張本人に愚痴を漏らしていた。

そんなことはいざ知れず、ショートカットの少女が不思議そうにぽつりと言葉を零すのが巧の耳に滑り込んでくる。

「……ここ、どこだろう」

「さあな。大方どこぞの大亀の背中じゃねぇのか？」

んなところに来させられてたまるかバカ。

もしそれが本当になったらどうすんだ。不吉なことを口走るんじゃねぇ。

現在イライラが頂点に達しそうな巧は、金髪少年の言葉に叫びたい気持ちを抑えて内心でそれをするに留まる。ここで怒鳴ってしまっては何だか自分が滑稽に思えてしまうからだ。あと面倒くさい。

そんな巧の心もこちらも知らずに、見た目如何にも不良ですといった少年は曲った金髪を跳ね上げてから再度口を開く。

「まあ、冗談は置いといて。一応確認しとくけど、お前らにもあの手紙が？」
「そうだけど、まず『お前』って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後気を付けて。……それで、そこの猫を抱きかかえてる貴女は？」

少年の礼節もなにもあった物ではない問いかけ方に、気に食わなかったのか応じるように少女――――久遠飛鳥は挑発的な態度と鋭い眼光を持ってして答えるが、しかし少年には答えた様子はない。
少女はその鋭利な目つきで少年を睨んだ後、今度は別の少女へと問いかける。
「……春日部耀。以下同文」
「そう、よろしく春日部さん。それで？　目つきの悪い野蛮で凶暴そうな貴方は？」

先ほどの会話が尾を引きずっているのか、久遠飛鳥は少年に対しての攻撃的な態度を緩めずに語りかける。
しかしやはり少年には堪えず、彼はおどけた様に笑って肩を竦めた。

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見た目通りで野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗悪で凶暴で快楽主義者と三拍子揃ったダメ人間なので、用法と用量を守った上で正しく接してくれよ？　どうも強気なお嬢様？」

掴み所を掴ませまいとするかのように飄々とした態度を取る少年――――逆廻十六夜。

雲のようにふわふわと存在を浮かばせている十六夜の態度に、飛鳥は顔を顰めて返す。

「そう。取扱説明書を作ってくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハッ、マジかよ。今度作っとくから覚悟しといてくれお嬢様」

どうにも心底が掴めない逆廻十六夜。

見るからにプライドが高く傲慢そうな久遠飛鳥。

それらの騒ぎをそばで聞いていても我関せずの態度を貫き、なぜか猫に喋り掛ける春日部耀。

その個性的すぎる集団を遠巻きに眺めた乾巧は、本当に面倒くさそうな雰囲気を醸し

出していた。
元来怠け者の気質が強い男である。しかも口も悪く笑うことなど滅多にない無愛想の塊ときた。
この気質のせいで何度元の居場所で同じく同居人の少女と口喧嘩になったことやら。

ちなみに先ほども申した通りに、巧に彼らとつるむ気は全くもって皆無である。
理由としては、彼が口下手であることもそうではあるがなんか見ていてムカつくのが一番の原因だった。特にあの十六夜や飛鳥と言った少年と少女。

十六夜は何だか飄々としていて、すかした（巧の偏見が生み出しているに過ぎない）態度がなんか気に入らない。
飛鳥は見るからにプライドが高そうで、口を開けば恐らく偉そうにあーだこーだと講釈を垂れてくるに違いない。しかも自慢げな顔を付けて。
そんな雰囲気が気に入らない、というか面倒くさいのだ。ハッキリ言って気の強い女とはあまり関わり合いたくないのが巧としての本懐である。それは彼の過去における体験が物語っているのだが、まあ今はいいだろう。

しかし、どうやらこの世界にいるかもしれない神は、この超絶無愛想な男に救いの手は差し伸べられなかった。

「――――――それで、先ほどからずっと黙り込んで仏頂面でいるそこの貴方は誰なのかしら？」

背を向けた方角から響く、少女の凛とした声。

しかし巧は振り返らず無視を決め込む。ここで接点を持ったら碌な事がない。

だがことは彼の意向とは正反対に進行していく。

「……無視かしら」

「……」

「こちらから話しかけているんだから、返事くらいはしてくれてもよいのではなくて？」

「そうだぜ。これから俺たち、もしかしたら運命共同体になるかもしれないんだから、今の内に仲良くしとこうぜ？　旅は道連れ、とも言うしな」

「……」

ふざけんな、誰がテメェらみたいな奴らと運命共同体になるかっつうんだ。勝手にやってやがれ。　あと話しかけんな。

そんな言葉を口任せに飛ばしてやりたい気持ちがあったが、このまま黙っていれば恐らく事態は好転しない。

いや、寧ろ悪化の一途を辿るだろう。主に巧にとって。

故に巧は黙秘を放棄する。そして重いため息を短く漏らす。

それに反応した久遠飛鳥は、片眉をピクンと上下させた。

「……何かしら、今のため息」

「なんでもねぇよ」

「何でもないならため息など吐かないはずなのだけれど」

「なんでもねぇっつってんだろ、うっせぇな」

ぶっきらぼうに返せば明らかに私不快ですと言った風に口を尖らせる久遠飛鳥。

それを意に反さず、巧は不満そうな態度を隠しもせずにぼそりと切り出した。

「……巧。乾巧だ。別に俺の自己紹介はいいけどよ、後ろの物影に隠れてる奴をどうにかしなくていいのかよ」

親指で彼の後ろに生い茂る草むらの中の一つを指差した。

それが図星なのか、彼の後ろの草影がそれに呼応するようにガサガサと物音を立てて揺れる。

「へぇ、お前も気付いてたのか」

「あら、貴方も？　実は私もよ。見た目に似合わずやるのね、そこの男同様に」

「当然。かくれんぼじゃ負けなしだぜ？　そこの猫抱えてるお前も気付いてんだろ？」

「……風上に立たれたら嫌でも分かる」

「へえ？　お前も面白いな」

「……何が面白いんだよ」

巧は静かに毒づく。

やっぱり彼はこの逆廻十六夜が嫌いなようだった。

他の三人がその者の存在をなぜ感知できたのかは疑問だが、巧には明確な理由があった。

これは巧のみならず、彼と同類の種族――――即ちオルフェノク全体に言えることなのだが、彼らは一度死にオルフェノクとして覚醒すると、その五感が生前と比較して飛躍的に上昇する。

数千メートル離れた人間の悲鳴を聴き分け、その場所を探知したり。

どこかで流れた血の匂いを嗅ぎ分けてその生物の場所を特定する。

故に、彼らは人間に対して探知に関しては必然的にアドバンテージを得ることができるのである。

こういった点からも、強ち彼らが人類の進化形態というのは誇張でもないのかもしれない。

それに付き纏う代償はこの上なく大きいが。

また何の皮肉か、彼はこの力のおかげでオルフェノクを撃退し、多くの人間達を守ってきた。

その人間に恐怖されて罵倒され、また感謝はされど、受け入れてくれた物は両手の数ほどもいないが。

とにもかくにも、巧はオルフェノクとしての恩恵により湖から出てきて数分してから隠者の所在を掴むことができたのである。しかし彼らも巧と同じか、もしくはそれ以前から気付いていたようなことを言っていた。彼らも普通の人間ではないことは容易に想像できるだろう。

まさか全員オルフェノク、なんてことはないだろうが。というか考えたくもない。

皆の視線を浴びた隠者は――――恐らくはここへ呼び出した張本人と四人は踏み、その茂みを無意識か鋭い視線で睨みつける。

いきなり上空へ放り出された挙句、湖へと叩き落とされてびしょ濡れにされたのだ。表面は怒っていない様に見えても実際表に出していた巧以外の彼らであっても、それは怒るなと言う方が難しいだろう。

やや殺気の籠もった突き刺すような視線を浴びた隠者は、ついにその雰囲気に耐えられなくなったのか、茂みを揺らしてそこから姿を顕わす。

巧は怒りを孕んだその瞳を、その者の姿を見て思わず怒りも忘れて丸くした。

茂みから出てきた少女を言い表すならば、頭にウサ耳を付けた美少女。所謂どこぞの誰かが熱中的になって楽しんでいる『コスプレ』とか言う奴だろうと巧は推測した。

ミニスカートにガーターソックス、果ては賭博場で見かけるようなバニーガールのような服装。

明らかに『そういうことをします』といった風貌に、巧の仏頂面が一瞬崩れかけたのだ。

その見た目はあまり十六夜達と変わらないような歳の少女は、どういうわけかウサ耳をまるで本物のウサ耳のようにヒョコヒョコと動かせながら力なく彼らに笑いかける。

「や、やだなあ皆さん。そんなに怖〜い狼みたいなお顔で睨まれると黒ウサギは死んでしまいますよ？　ええ、ええ、古来より孤独と狼はウサギの天敵でございます。ここは黒ウサギの脆弱な心臓に免じて、一つ穏便にお話を聞いていただけたら嬉しいのでございますヨ？」

愛嬌のある話し方でこちらを懐柔して、自身にくる怒りの猛攻をなんとか回避しよう背中に大粒の冷や汗を滝のように流しながら説得しようとする黒ウサギ。きょどっているように見えるのは怯えの表れか。

しかしどうやら彼女の決死の説得は空しいほどに、彼らは頭に超が百個ぐらい付く問題児？　だったらしい。

「断る」　とにべもなく答える十六夜。
「却下」　と微塵の隙も見せずに突っぱねる飛鳥。
「お断りします」　と丁寧に即答する耀。
「嫌だね」　と相も変わらず無愛想に突き返す巧。
「あっは♪　取り付くシマもございませんね全く」

清々しいまでの即答ぶりに思わずバンザーイ、と両手を上げて感服と降参の意を示す黒ウサギ。

おどけた様に見せながらも、瞳だけは計算高く少年少女ら――約一名少年扱いを受けたくない男がいるが――を値踏みするかの如く見定めていた。

肝っ玉は及第点。ここでＮＯと言えるほどの勝ち気は買いです。まあ扱いにくいのは難点ですけど。

さてさて、このどうにも一癖も二癖も、三癖すらありそうな集団に如何様に接すべき

かと黒ウサギは緻密な思考を張り巡らせる。

だからだろうか。

普段の彼女らしからぬことに、初対面の相手に感づかれるという失態に続いて。

背後に忍び寄る影に気付くことができなかった。

その忍び寄る影――――なぜか妙に熱っぽい瞳で彼女のウサ耳を見つめながら接近した春日部耀は、その黒髪の頭の頂点に生えている？　ウサ耳をそっと片手で掴み、そして。

「えいっ」

「フギャっ!?」

少し力を入れて引っ張ってみた。

突然の行為におっかなびっくりした黒ウサギは、さきほどのおどけた調子はどこへやら、必死になって自身の自慢の耳を心なしか嬉しそうに掴む少女に抗議する。

「ちょ、ちょっとお待ちを!?　触るまでなら黙って受け入れますが、まさか初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引っこ抜きにかかるとはどういう了見ですか!?」

「好奇心の成せる業（わざ）」
「自由にもほどがあります！」
「なんだ、このウサ耳って本物なのか？」

何時そこにいたのか、未だ余っている部分の右の耳を十六夜が掴む。

「……じゃあ、私も」

今度は飛鳥が興味本位で左を掴む。
何だか壮絶に嫌な予感がした黒ウサギは、少々顔を青ざめさせて待ったを掛ける。

「ちょ、ちょっとお待ちを――――――」

が。
抵抗も空しく、彼女の両耳はそれぞれてんでバラバラな方向に引っ張られ続ける。しかも何だから力が強い。
黒髪にから黒いウサ耳を引っ張られ、言葉にならない絶叫を上げて涙目でそばで傍観

していた巧に助けての意志を送る黒ウサギだが、意図的に視線を逸らされてしまいそれは望めず、彼女はさらにウサ耳から来る痛みに絶叫を上げることとなった。

救助支援を見事なスルースキルで回避した巧は、先ほどまで見ていた灰色の空とは違い、どこまでも真っ青に広がる青空を見上げながら呟く。

どうやって帰ろう。

罪を背負った灰

「――――あ、あり得ないのですよ。まさか話を聞いてもらうために小一時間も消費してしまうとは。ＨＥＬＰを込めた視線も回避されてしまいましたし……」
「御託はいい。さっさと話せ」
若干イライラした様子で告げる巧に、黒ウサギは半ば本気の涙目を浮かべながらハイ、と頷く。
聞くだけ聞こうといった様子で座る問題児達に向かって彼女は立ち上がり、咳払いをして両手を広げた。
「それでは皆々様方。定例文で言いますヨ？　言いますヨ？　さあ言います！　ようこそ〝箱庭の世界〟へ！　我々は皆さんにギフトを与えられた者たちだけが参加できる『ギフトゲーム』に参加していただこうとこの世界へと召喚しました！」
「ギフトゲーム？」
「ＹＥＳ！　既にお気づきかと想いますが、皆さんは普通の人間ではございません！
その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でご

ざいます。『ギフトゲーム』はその恩恵を用いて競い合うためのゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力をもつギフト保持者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

黒ウサギの笑顔で繰り出された言葉に、巧の動きが一瞬止まる。

このウサ耳女、気付いてやがんのか？　一体何時から？

自身がオルフェノクであることは、この場にいる誰にも知られてはいないはずだ。

あの姿は見せてはいないのだから、どうやっても知られるはずがないのだ。しかし彼女は、普通の人間ではないと言った。しかも全員。

想わず疑心暗鬼に陥り掛ける巧だが、しかしその可能性を切り捨てた。

普通の人間ではないとは言ったが、彼女が言うには彼らはギフトなる者を与えられた者たちだそうだ。何もオルフェノクとは言っていない。だからこそ、彼らはまだ人間という枠に収まっているはずである。

それよりも、彼女は気になることを言っていた。

ようこそ〝箱庭の世界〟へ、と。

我々は召喚させてもらった、と。

もしも彼女の言葉が頭がおかしな信者の集団の妄言でなければ、自分たちはあの世界

からどこか別の世界へと転移させられた可能性もある。
実際人が死んで甦ることもあるのだ。異世界へと転移させられることもあるかもしれない。
じゃあ、本当に別の世界なんてものに来ちまったのか？
その事実を認識してしまうことを、彼は心の奥底で拒む、拒み続ける。
それが事実だとしたら、もしかしたら自分はこの世界で『アイツ』の夢もかなえられず、ここで来るべきその日を迎えてしまうかもしれないのだから。
動揺に動揺を重ね続けるが、彼の隣で説明を続ける黒ウサギに、飛鳥が手を上げて質問をしている声に我に帰る。
いや、まだここから帰る手段がないわけではない。
こちらへと引き摺りこむ手段があるのだ。ならば帰る手段だってあるはずである。
ここでくたばるわけにはいかない巧は、なんとか心を持ち直して黒ウサギの話を聞く。
「まず初歩的な質問からしていい？　貴女の言う〝我々〟とはあなたを含めた誰かなの？」
「ＹＥＳ！　異世界から呼び出されたギフト保持者は箱庭で生活するにあたって数多とある〝コミュニティ〟に必ず属していただきます♪」

「「嫌だね」」

「属していただきますッ!!」

彼女の必死の講義に、思わずたじろぐ巧。彼にしてみれば一々そんな組織に属している時間は無いしする気もないのだが、まさかここまで必死に返されるとは思わなかった。全く同じタイミングで言った十六夜はどこか怪訝そうに眉を顰める。

彼女は少しハッとなって我に返り、コホンと咳払いをすると再び笑みを浮かべ説明を再開する。

彼女曰く、ギフトゲームの勝者はそのゲームを主催する〝主催者(ホスト)〟と呼ばれる暇を持て余し試練を用意する修羅神仏や、または自身のコミュニティの力を誇示するグループなどから提示した賞品を得られるという構造なのだとか。

一見すれば簡単なように見えるが、ゲームの難易度はそれぞれで、命を落とす危険がある試練のようなものから戯れのようなことまで存在する。

無論、難易度によって〝主催者〟から得られる恩恵は変化する。難しければ難しいほどに、その賞品はより有益な物となる。

また参加する者にはチップ、即ち代償を得られるのが定石であり、時に命、時に名誉、時に土地、時に人材、時に恩恵など千差万別。知恵を絞り、力を尽くし、勇気を持つ。それらを兼ね備えてこそギフトゲームはクリアできる数が増えるのだと彼女は告げる。

ではギフトゲームが法そのものなのかと聞かれれば、その答えは合っているようで少し違うらしい。

この箱庭の世界であったとしても窃盗や強盗は厳禁であり、恩恵を用いた悪事などもってのほか。故に厳重に処罰されるが、しかしギフトゲームに勝てば対象からその全てを奪い取ることさえ可能である。

例えば、人材の命を掛けて〝主催者〟が提示した条件をクリアすれば、その者を殺すことも奴隷として一生隷属させることも意のままである。

その詳細を聞いた久遠飛鳥は野蛮だと吐き捨てる。

「ごもっとも、しかし〝主催者〟は全て自己責任でゲームを開催しております。つまり奪われるのが嫌な腰ぬけは初めからゲームに参加しなければいいだけの話でございます」

一通りの説明を終えたのか、黒ウサギは一枚の封書を取り出す。

「さて、皆さんの召喚を依頼した黒ウサギには、箱庭世界における全てを説明する義務がございます。が、それらを全て語るには少々お時間がかかるでしょう、新たな同士候補

である皆さんを何時までも野外に出しておくのは忍びない。ここから先は我らのコミュニティでお話させていただきたいのですが……よろしいです？」

「待てよ。まだ俺が質問してないだろ」

黒ウサギの言葉を遮って、十六夜が少々威圧するような声音で話しかける。

それに眉を顰めた黒ウサギは、身構えながら問い返す。

「……どういった質問です？　ルールですか？　ゲームそのものですか？」

「そんなのはどうでもいいんだよ黒ウサギ。ああ、本当にどうでもいいね。俺が聞きたいのはただ一つだけ」

彼はスッと立ち上がり、その高慢さを宿した瞳で彼女に告げる。

「――――この世界は、面白いか？」

頭おかしいんじゃねぇの？　コイツ。

巧は思わずそう想った。
何故に世界に面白みを求めるのかが巧としては理解しがたい物ではあった。
なにせ話に聞けば神様やら仏様がいるらしいではないか。そんなところに面白みを求めてどうするというのだろうか。
バカバカしくて理解を放棄している巧の視線にも気付かず、十六夜は黒ウサギをまっすぐ見つめる。
その黒ウサギは暫し沈黙した後に、僅かに笑ってこう告げた。
「ＹＥＳ。『ギフトゲーム』とは人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします」
コイツも何言ってんだ。お前ら全員頭おかしいのか。
もはや付き合いきれんとばかりに巧は決心し、黒ウサギに一番聞きたかったことを聴取するために挙手した。
「はいどうぞ。まだ何かお聞きしたいことがございますか？」

「ああ。俺も一つだけ聞きたい」

ただでさえ寿命が短いのに、こんなところにいたらもはや無いにも等しい物である。そんなことになれば、今まで背負った『罪』にも『夢』にも顔向けができないというものだ。

巧は一度息を吐いて、しっかりと言葉を整理してから、はっきりと、明確に告げる。

「なぁ、どうやったら元の世界に戻れるんだ?」

つか返せ、とは続かなかった。さすがにそこまで言えばもしかしたら色々とおじゃんである。

巧の言葉を聞いたその時、黒ウサギの笑顔が固まった。

笑顔は硬直した後に、黒ウサギはその歪な笑みのままに信じられないとばかりに聞き返した。

「……え、ええと。すいません、もう一度言って頂けますか?」

「帰る方法を教えてくれ」
「もう一度」
「帰る方法を教えろ。三回も言わせんな」
「え、あ、す、すいません！　そうですかー帰りたいんですかー。なるほどー」

愛想笑い全開で受けこたえる黒ウサギを、猜疑心が籠もった瞳で巧は見つめる。
明らかに不自然である。
その視線を受けて背筋に冷や汗を大量に流しながら、黒ウサギは策略を張り巡らせる。

マジですか。
マジでございますか。
マジのマジで帰りたいと仰ってるんですか、この仏頂面の殿方は。

小さな子供にそれを向ければ、間違いなくマジ泣きしちゃうであろう強面を維持し続ける十八歳を見ながら黒ウサギは苦笑いを禁じ得なかった。
ここでハイどうぞと返して、帰り方を教えるのは簡単だが、仮にもしそれをやってし

まえば迷いなく目の前の茶髪の少年と青年の中間のような歳の男はここを立ち去るだろう、後腐れもなく。

それは黒ウサギにとっては非常にまずい。そんなことをされれば、彼女が三日前から考えてきた作戦がパーになってしまう。寝ないで考えた時間が無駄になってしまう。

それだけは阻止しなくては……！

心の奥底でなにかを決めた彼女は、愛想笑いをさらにニコニコ笑顔に変えて巧に向ける。

「えっと、そこの殿方。少しこちらへ。他の皆さんは少しお待ちください。すぐに終わりますので」

「お、おいっ、なんだよいきなりっ」

可愛らしい笑顔に隠された意味を勘繰った巧は、問答無用で手を引っ張られながら他の問題児たちから離された場所へと連れて行かれる。

ようやく立ち止った黒ウサギへと向けて、巧はただでさえ歪められていた眉を更に顰

めた。

「おい、一体何だってんだよ」

「いやはやすいません。先ほどの続きでして。……で、帰りたいと申されるんですか？　本当に？」

「だから言ってんだろ。さっさと帰らせろ」

「ハハ、やっぱりそうですかーでもいいんですか？　せっかく神魔の遊戯が集う箱庭へと来たのに。ここに居れば、きっと前の世界では手に入らない物が手に入りますヨ？巨万の富も、きっと素晴らしい未来だって築くことができるでしょう」

「……別に欲しくない。金はいらないし、あっちの世界にやり残してきたことがある。それに何より、俺には残された時間が少ない」

え？　と思わず黒ウサギは聞き返した。

しかし巧は答える気はない。

見ず知らずの誰かに、自身の体のことや正体を、軽々しく語れるほど彼はお人好しになったつもりはない。

急がねば、『アイツ』の夢が果たせなくなってしまうかもしれない。

その夢を果たした後に、必ず帰ると決めているのに、その場所に帰れないかもしれない。

自分が想っている以上に、乾巧の心は焦燥でいっぱいだった。

それは表面上に出るほどに溢れだし、黒ウサギが気付くほどのものとなっていた。

彼女は巧の『焦り』を察すると、理由は分からないなりに感じ取り、少し真剣味を帯びた声音で声を掛けた。

「……あの、何か御病気にでも罹っているのでしょうか？」

「……だったら何だよ」

「それでしたら、尚のこと私たちのコミュニティへ入りませんか？　この箱庭は修羅神仏が集う世界。故に、病を治す医療の神も数多く存在しています。ギフトゲームに勝利して医薬のギフトでも手に入れれば、きっとその病を治して、生き長らえることだってできるはずです。ですから、」

「お断りしますって奴だ」

一秒の間もおかずに男は返した。

思わず絶句する黒ウサギ。しかし巧はそれ以上を語ろうとしない。

「……ど、どうしてですかっ!?　もしかしたらもっと長く生きられるのに、むざむざただ死を待つだけの世界に戻るんですか!?　なんでそんな苦痛を――――」

「知ったように言うんじゃねぇよ」

巧の眼光がギラリと光る。錯覚かも知れないが、僅かに瞳孔が灰色に染まった気がした。

彼の外見ではなく、纏う『何か』が変質したそれに当てられ、黒ウサギは口を噤んでしまう。

巧は黒ウサギの変化に気付くと、ハッとなった表情になった後に舌打ちをしてそっぽを向く。

またやってしまった。自分でも気付いているのだが、どうにもこの口の悪さは治らない。

「……俺は、別に神様に頼んでまで生きたいなんて思ってない。人間てのは、何時か死ぬもんだ。ただ人によって、それが長いか短いかだけで。短い俺は、『その時』まで必死こ

いて、あっちの世界でやらなきゃいけないことがたくさんある」

『夢』の意味を教えてくれた少女がいる。
洗濯物の素晴らしさを教えてくれた男がいる。
『お前の音楽は凄い』と、鬱陶しいながらも褒めてくれた奴がいる。
笑うと意外と可愛い赤ん坊がいる。
志半ばで信じていた人間に絶望した、自分が殺した男の『夢』がある。
だから、俺はこんなところで終われないんだ。
悠長に、自分が生きる為だけに歩くわけにはいかないんだ。

巧は、背中に背負った灰にそう誓ったのだから。

「悪いが、お前たちのその……コミュニティ？　っつうのには入れない。俺はどうしても帰らなきゃいけない。だから頼む、帰り方を教えてくれ」

今までのぶっきらぼうな態度からは全く想像できない、真摯な声音で巧は頼み込む。
普段から目上だろうがなんだろうが、基本的に人に対して口を開けば悪口がでてくる

巧にしては珍しいことではあった。
その静かな、しかしどこか鬼気にも迫った物を込めた言葉に、黒ウサギは先ほど気圧された時とは違う物を、目の前の男から感じていた。
そして、その感じる物が彼女にはどこか心当たりがある。
なにせ、今現在彼女をこうして動かしているものだから。

この人も、誰かのために動いている。

箱庭の創始者の眷属であり、天真爛漫にして温厚篤実、献身の象徴とまで呼ばれる謂わば自己犠牲の塊とも言える種族故の特質も相まって、恩義を得たコミュニティの為に奔走している彼女と、どこか似ているのだ。
自分の身を煉獄で焼かれようとも、誰かの為に闘う彼の気持ちが、なぜだか黒ウサギには痛いほどよくわかる。
その想いを断片的にでも感じ取れるほどの言葉を告げられてしまえば、黒ウサギとしても帰してあげたい気持ちが顔を出してしまう。
しかし。

自分の一時の情に任せて、流されていい……そんな甘い状況にいないことは、黒ウサギが十分よく分かっているのです。

故に、彼女はここでどんなことをしてでも巧を止めなければならない。

この時だけ、彼女はあらゆる感情を押し殺す。

「貴方のご事情はよくわかりました」

了承を貰えそうな言葉に、小表情はそのままに巧は少し嬉しそうに息を吐く。

「しかし申し訳ありません。黒ウサギは貴方の世界への帰る術を持ち合わせてはございません」

「――――――はぁ!?」

まさかの帰り方法は私持ってません発言に、巧は少々苛立ちの混じった素っ頓狂な声を上げる。

しかし黒ウサギは動じない。

ここで返せば、今頃本拠で待っている自身のコミュニティの仲間が報われない。
そして、この男もむざむざ救えるのにわざわざ死にに戻らせるようなことをさせるわけにはいかない。
だって、そんなことは、悲しすぎる。
自己満足と自覚しながら、強ち嘘ではない嘘を突く。
それでも、ここまで打算がよくできている自分を嫌悪する気持ちは否めないが。
黒ウサギは少し悪戯っぽく笑って、

「今乾さんには、帰る術がございません。今すぐ帰れないのならば、当然この世界でその術を探すほかございません。しかし乾さんは、先ほどコミュニティには入らないと申されました。……つまりは、所属コミュニティがない且つ余命が短い貴方様は、この世界で生きていく上で現状凄まじく困難な現状に置かれている状態なのです」

彼女に言われて、顔を顰める巧。
確かに、この世界を死に場所にしたくない巧にとっては、今の状況は絶体絶命と言っても過言ではないだろう。
この世界の金品などは持ち歩いているわけがないし、紙幣だって円を使っている可能

性は無いに等しい。

しかもおまけに神様仏様がいるときた。ならば悪魔や鬼だっているかもしれない。一人でいるときに態々襲われでもしたら、一応人間ではある巧としてはそれこそ窮地だ。

頭はそれほどよくはないが、そういうことぐらいは巧にだってわかった。

故に、目の前で何だかムカつく笑顔を浮かべる少女を睨む。

この野郎、嵌めやがったな……！

勝手に引き摺りこんで、しかも入らざるを得ない状況に追い込んできた。

他のコミュニティに入るという手もなくはないが、組織として成り立っているからには簡単には抜けられないだろう。

しかも、自他共に認めるこの無愛想な性格である。まず入れてくれるかどうかも分からない。

しかし目の前には、今まさに無条件で入れてくれるコミュニティの一員が。

何ともまあ、策士なことか。

ニコニコ笑顔の裏に隠された真意（大きなお世話）を感じ取った巧は、このまま頷くのが憚られた。

主に、彼の負けず嫌いな性格のせいで。

「どうします？　入りますか？　入りませんか？」

満面の笑顔でこれみよがしに突きつけてくる黒ウサギ。

下唇を噛み締めて、なんとかその笑顔を困り顔にしてやろうと必死に思考するも、如何せん巧はそこまで秀才ではない。

全部コイツの掌の上だったってことかよ、クソッタレ!!

今さらながらに手紙を読んだことを後悔しても時すでに遅し。

もう一度、乾巧は射殺さんばかりの鋭い眼光を、今も花が咲くような笑顔をこちらに向けている黒ウサギに向ける。

もはや選択肢は、一つしか残されていなかった。

何もこの状況を打破する策が浮かばない巧は、グシャグシャグシャグシャァァッ!!

と両手で頭を掻き毟り、観念したように空を仰ぎ見る。

「――――……だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!　わーったよ入ればいいんだろ入ればよッ!!　その代わり帰り方が見つかった瞬間に帰らしてもらうからな!!」

「ＹＥＳ♪　加入決定ですね!!」

巧の自暴自棄気味の返答を、満足そうに微笑んで、頬すら紅潮させて喜んだ。よっぽど嬉しかったのだろう。

その嬉々とした表情を見た巧は、悪態の二つや三つでも突いてやろうとしたのだがここまで嬉しがられると居た堪れない気持ちになり、つい舌打ちをしてそっぽを向く。

そんな横顔を、黒ウサギは優しく微笑みながら見つめる。

しかし内心、彼女は良心の呵責に囚われていた。

皆さんを招待したら、しっかりとお話ししておかねばなりませんね。

ずっと隠し続けているというのも、不条理な話です。

取り合えず、このままここにいる訳にもいかないので、待っている他の者たちと待たせている自身のコミュニティのリーダーのところへと急がねばなるまい。

二人は場所を移動し始めた。

この出会いを機に。

運命という名の歯車はゆっくりと、亀が歩みを進めるかの如く。
少しずつ、本来の軌道から逸れ、変えられないほどに狂わされていく。

罪深き森の王者

「一刻ほどで戻ります！　皆様は箱庭ライフをご堪能くださいませ!!」
そう告げて髪を緋色に染めた黒ウサギは、弾丸の如き速さで行ってしまった。
あっという間に巧達の視界から消え去ってしまった彼女を見て、飛鳥が感心したように呟く。
「……箱庭のウサギは随分速く飛べるのね」
「ウサギは箱庭の創始者の眷属。身体能力などもそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせています。彼女ならば、きっと〝世界の果て〟に行ってしまったもう一人の方を無事連れて来てくれるでしょう」
飛鳥の呟きに答えたのは、丈に見合わない古臭いロープを着こんだ緑髪の少年だった。
巧の説得に黒ウサギが尽力している間に逆廻十六夜が『ちょっと世界の果てを見てくるぜ！』とかなんとか台詞を残して断崖絶壁を超えて行ってしまったので、怒りに震えた〝箱庭の貴族〟と呼ばれた黒ウサギは、その激怒の力で髪を緋色に変え、彼の後を追って行って以下略なのである。

その時に巧達を預けたのが、この目の前の少年なのだ。
こんな小さいガキもメンバーってか？　まさかコイツにもその『ぎふとげーむ』ってのをやらさせてるんじゃねぇだろうな。
先ほどの会話からしてもそうだが、巧は黒ウサギ及びそのコミュニティに猜疑心を募り始めた。
何故だか露骨に自分たちをコミュニティとやらに入れたがるものの、しかしコミュニティの名前やら実態やら現状やらは全く触れようとしない、触れさせようとしない。胡散臭さ満点である。
この調子なら、子供を他所から攫って無理やり働かせてます、なんて黒いところも出て来そうだと巧は想う。
「初めまして。コミュニティのリーダーであるジン＝ラッセルです。今年で齢十一歳になったばかりの若輩者ですが、どうぞよろしくお願いします」
「久遠飛鳥よ。そこの猫を抱えてるのが」
「春日部耀」
何の反応も示さずに普通に挨拶を返した二人に、巧は素で驚いていた。
まさかこんな子供がコミュニティのリーダーをやっているという事実にも驚きだが、それに対して少し反応がなさすぎではないだろうか。

お前らの感性どうなってんだ。なんでそんなに反応薄いんだよ。
そんな言葉が一瞬喉まで出かかったが、もはや巧としてはツッコム気にもなれなかった。ここまで自然に流されると、まるでこちらが変な感性を持っているように思えてきてしまう。
「それでさっきから不機嫌そうな顔をしている、そこの男は」
「不機嫌そうな顔で悪かったな」
「言われるのが嫌なら少しは楽しそうな顔でもしていたらどう？」
「この顔は生まれつきなんだ、余計なお世話っつうんだよ」

最初のやり取りが後腐れがあったのか、事あるごとに突っかかってくるお嬢様の言葉に不機嫌そうに返す。
そうしていても埒が明かないので、巧は舌打ちをした後にジンに向き直る。苛立ったままの視線を向けられた少年は、僅かに強張った。
「……乾巧だ」
「は、はい！　どうぞよろしくお願いします！」
ぺこりと行儀よく頭を下げる。
その仕草が、どこか『アイツ』を連想させる礼儀正しさで、少しだけ懐かしくなった。

軽い自己紹介を終えた後、ついに耐えきれなくなったのか飛鳥が急かす。
「さ、それじゃ箱庭の中へと入りましょう。まずはそうね、軽い食事でもしながら話を聞かせてくだるかしら」
胸を躍らせているかのような笑顔でジンの手を取って、外門と呼ばれる門を一足先に潜って行った。
巧は思わずまだまだガキだと思わざるを得ない。自分だって大人かどうかは怪しいくせに。
ため息を零しながら、彼は後ろを付いていった。

■　■　■　■　■　■　■

門を抜けた巧達を迎えたのは、頭上を天幕で覆われているはずなのに、堂々と見栄えた太陽から発する陽光だった。外から見たときには中は確認できなかったのに、なぜか中側からは太陽が見えたのである。
これにはさすがに驚いた。

巧だけでなく、皆一様に不思議そうに天を見上げる。しかしなぜ天幕で覆っているのだろうか。

「箱庭を覆っている天幕は内側からは不可視になっているんです。その天幕は、太陽光を浴びることができない種族の為に作られたものですから」

皆の疑問を肩代わりするようにジンが捕捉する。

なんでも彼がさらに続けていった言葉によれば、この箱庭には吸血鬼が常識的に存在しているらしい。神様がいるのだから不思議ではないだろう。

この調子だと、この世界にオルフェノクがいてもおかしくはない、などと洒落にならならないことを巧は一瞬思った。笑えなさすぎる。

しかし仮にいたとしても、元の世界――地球でただでさえ生存率が低かったのに、こちらの世界ではさらに激減していそうだ。なにせ神様がうじゃうじゃいるらしいのだから。

しかし今は考えることではあるまい。バカらしくなった思考を巧は頭を左右に振って振り払った。

と、思考の海に没頭して気付かなかったのか、ジン達がなにやら六本の傷が入った旗を掲げるカフェテラスへと入っていったのを見かけて、少し慌てて店内へと入る。

純白のテーブルと椅子に、皆が腰を落ち着けると置くから何と奇怪なことか、エプロ

ンを付けた猫耳の少女が出てきた。もはや驚きもしない。あまりにも非日常に慣れてしまっている。

「いらっしゃいませー。ご注文はいかがいたしますかー？」

「えーと、紅茶を三つと緑茶を一つ。あと軽食にこれと――――」

「紅茶は一つは冷たくしてくれ。温めたのはいらない」

「「え？」」

「はいはーい。ティーセット三つで、その内の紅茶の一つはアイスで。少々お待ちくださいねー♪」

鍵のような尻尾を揺らしながら店員が引っ込んだ。三人と一匹の視線が男に注がれる。

「……何だよ」

「……え、いえ。ただなぜそのような注文を……」

「別に何だっていいだろ」

突き放すような態度を取る巧。

どうやら追及されたくないようなので、ジンは申し訳なさそうに引き下がったが、その無愛想な態度はどうやらお嬢様気質の少女には気に食わなかったらしい。飛鳥は口を尖らせて巧に喰ってかかった。

「ちょっと、その言い方はないんじゃないの？」
「どう言おうが俺の勝手だろ」
「もう少し愛想よく会話という物ができないのかしら。貴方には相手に対する考慮というものが足りていないわ」
「余計な御世話だ」
「……ねえ、なんでそんな言い方しかできないの？　そんなことでは誰とも上手くいきっこないじゃない」
段々と厳しくなる少女の叱責も、関係ないとばかりに巧はそっぽを向いた。
その態度にますます機嫌を悪くした飛鳥は更に捲くし立てようとしたのだが、注文の品が来たことで遮らてしまう。
今まで外野で見ていたジンは、ヒートアップしそうな雰囲気に嫌な予感を感じ、その隙をチャンスと見たのか宥める様に笑みを浮かべる。
「ま、まぁまぁお二人とも落ち着いてください。せっかくこれから一緒にやっていくんですし、ほら、今はゆっくりと話しましょう」
「おい、俺は落ち着いてるぞ」
「別に私も特段興奮してはいないわ」
鼻を鳴らしてそれぞれの品を取る二人。そのそばのジンは、乾いた笑いしかでてこな

かった。
もう、勝手にすればいいじゃない。どうせ元の世界でも友達がいなかったんでしょ。
巧が聞いたらまたも口論に発展しそうなことを内心思いながら、飛鳥は口内に広がる紅茶の甘味で心を落ち着かせた。
それを傍らで見ていた春日部耀は、不思議そうに巧の横顔を見つめる。
この人、理解されようとしてないのかな？　しかも、どこか悪ぶってるところがあるのかも。
そんなことを想いながら、耀は甘い紅茶が上手いのか、どこか嬉々として口に運ぶ横巧の顔をマジマジと見つめた。
「……何見てんだよ」
「……別に」
酷く冷めた紅茶を機嫌良さそうに呑んでいた巧が、ジト目で睨む。少女はすぐに興味なさげに、膝の上に乗っかっている三毛猫に視線を移した。
「じゃあ見んな」
「別にいいじゃない。貴方に指図される筋合いはない」
「……そうかよ」
チッ、と舌打ちをして紅茶を喉に入れる。

何か膝元でニャーニャー猫が騒いでいる気がしたが、猫語など分からないので巧は無視した。なぜかその三毛猫に話しかける少女が酷く不可解だが。

あー、ウザッてェ。なんでこんなところに来ちまったのかな。

速くもこちらの世界でのギスギスした人間関係に嫌気が射している――自業自得なので擁護は不可能――と、そこで身の丈二メートルはあろうかというピッチピッチタキシードを着た悪人面をした男が、横合いから薄気味悪い笑みを浮かべながらいきなり現れた。

男の取ってつけたような笑みを見た瞬間、ジンの笑顔が一転して不快そうに歪む。

「……ガルド」

「おーおー、なんだなんだ？　何時から最底辺コミュニティ〝名無しの権兵衛〟のリーダージン＝ラッセルくんは、俺を呼び捨てできるほどになったんだ？」

「……僕らのコミュニティの名は〝ノーネーム〟です。それに今やこの近辺を荒らし回る獣となり果てたかつての守護者に、僕は敬意を払おうとは微塵も思いません、〝フォレス・ガロ〟のガルド＝ガスパー」

男――――ガルド＝ガスパーは少々尖った犬歯が飛び出ている悪人面で、ジンの言葉を鼻で笑った。

男の言葉からコミュニティの名前らしき単語が飛び出したことに、紅茶を呑みながら

巧は僅かに反応を見せる。ピクリと指が僅かに浮き上がった。
「ハッ、それをお前が言えた義理かよ。過去の栄華に縋り、今や黒ウサギに奔走させている亡霊が。コミュニティの誇りである名と旗を奪われ、それで尚且つお前の我儘でコミュニティを苦しめているお前が、一体どの面下げて俺にそんな態度を――――」
「ハイ、ストップ」
嫌悪感の上昇を肌で感じ取ったのか、飛鳥が手で制しながら割って入った。
「貴方達の仲が悪いというのはよくわかったわ。その上で質問したいのだけれど――――ジンくん。ガルドさんが指摘しいる私たちのコミュニティの現状……説明していただけるかしら？」
「……それは」
言い辛そうに口籠るジン。
巧も自身が一番知りたかったことなので、視線だけをジンへと向ける。
その横で、ガルドが嫌らしくニヤニヤと笑っていた。それを見た巧の眉間に、僅かに皺が寄せられる。
「よろしかったら私がお話しましょうか？　レディ」
紳士ぶって来やがった、この似非紳士。
巧が率直に思った言葉がそうであった。

しかし現状、ジンが素直に話すとは思えないので一番の情報源はガルドしかないのもまた事実。巧としては相当に嫌だが、この男に聞くほかあるまい。
もしかすれば本当にブラック企業顔負けの実態が浮かび上がってくるかもしれない。
巧と同じ意見なのか、飛鳥は一瞬顔を顰めて、無表情の物とした後に頷いた。
それを了承と受け取ったガルドは、嬉々とした表情で語りだした。

■　■　■　■　■　■　■

ガルドが語るには、まずこの箱庭でコミュニティを設立するためには『名』と『旗印』を申告しなければならない。特に旗印はコミュニティの領土を示すために必要な物なのだとか。
例えるならば、今いるこのカフェは〝六本傷〟というコミュニティの領土であるらしい。
「あら、その理屈でいくとここの近辺は貴方達のコミュニティの支配下、ということかしら？」

飛鳥の言葉に満足気に頷くガルド。
彼の胸に刺繍された同じ文様が、旗となってあちらこちらに飾られている。それを聞いた巧は、素直に感心した。
小物臭全開の悪人面の男で、それを裏切らない性格をしているが、どうやら口先だけの奴ではないらしい。
「さて、ここからがレディ及びジェントルメン達の問題です。貴方がたが入ろうとしているコミュニティは、数年前まではこの東区画最大手のコミュニティでした。リーダーも、今のような頼りない者とは違ってそれはそれは尊敬に値する人物でした」
ガルドが先代を持ち上げ、如何にジンが矮小かを示すように嫌味を込める。
自身への酷評にも侮辱にも似た言葉の暴力を、ジンは俯き、ただロープを握りしめることだけしかできなかった。
ガルドは嗜虐心に満ちた双眸でジンを見やると、話題に戻る。
「しかしそんな彼らも過去の栄華。その栄光は一瞬にして散りました。そう、彼らは目を付けられた、そして滅ぼされちまったんですよ。この箱庭に置いて〝天災〟と称される奴ら――――魔王にね」
「魔王？　なんだそりゃ。漫画かなんかじゃあるまいし」
ここにきて、巧が初めて声を上げた。よほど疑問に思ったからの行動だった。

飛鳥と耀も同じように思ったのか、僅かに同調するように頷く。

「魔王と言っても、貴方がたが想像するような物ではありませんよ。奴らは〝主催者権限（ホストマスター）〟と呼ばれる特権階級を使う修羅神仏で、本来両者の合意で成り立つはずのギフトゲームを強制的に行わさせる天災。奴らは暴風雨のように目に付いた物全てを薙ぎ払い、容赦なく破壊の雨を撒き散らす」

だからこそ、この箱庭において天災と称される。それが〝魔王〟である。意志のある災害と言ってもいいだろう。

ようはヤクザとやってること変わんねぇじゃねぇか。ソイツらよっぽど暇なんだな。

魔王を知る者が聞けば誰しもが耳を疑うであろう感想を抱く巧。彼には魔王の凄まじさは、実際に目撃しなければ実感できないのだ。自身が死んだと確信できたのが、彼の姿が変幻した所を目撃したように。

巧の中では、魔王とは即ちヤクザ及びオルフェノクとやってることや思考回路は変わらない奴らと言う結論で納得された。すなわちはた迷惑な奴らである。

しかし数多の修羅神仏が集う世界に置いて天災などと称されるとは、それほど恐ろしい存在なのだろうと、巧は己で自己解釈した。

「大体わかったわ」

飛鳥が得心がいったように、手に持っていたカップを置いた。

つまるところ、ジン達は自分たちのコミュニティには旗もなく、名もないほぼコミュニティとして機能していると言っていいのかどうかすら分からない状態であることを必死に隠していたわけだ。

名も旗もなければどこのコミュニティにも信用されない。そんなコミュニティには誰も入りたがらない。だから隠していたのだろう。

さすがに隠し通せるとは思っていないだろうが、少なくとも巧達が入るまでは隠したかったのであろう。

その話を聞いた乾巧は、拍子抜けした。

てっきり子供に鞭打って働かせている利益を得ている下衆なコミュニティかと思っていたが、どうやら彼らは働き手が少なすぎて子供しかいません、なんてこともあるかもしれない。

ハッキリ言って隠しごとをしていたのかどうかは巧にとってはどうでもいい。

裏切られるのは、慣れていることだ。

それよりも、この嫌らしい笑みを浮かべる目の前の似非紳士の方が次の巧の不信感を掻きたてた。

それを代弁するように飛鳥が問う。

「それで？　懇切丁寧に説明してくれたガルドさんは、どんな腹積もりで声を掛けてく

ださったのかしら」
飛鳥が少々棘のある言い方でガルドに鋭い視線を向ける。彼女は根本的にガルドのことを毛嫌いしているようだ。
しかしガルドはおどけた様に肩を竦めて、
「腹積もりだなんて滅相もありません。私はただ、貴方達を黒ウサギ共々我らのコミュニティにお迎えしたいと思っていただけですよ」
「何を――――！」
「黙れジン＝ラッセル。俺はこちらの方々に聞いてんだ」
ジンが思わず立ち上がる。
しかしガルドが一睨みしただけで、彼の気勢は削がれてしまった。怒気の孕んだ表情から一転、貼りつけたような営業スマイルでガルドは応じる。
「それで、どうですか皆さん。返事は今でなくとも結構です。外界から召喚された貴方達には三十日ほどの自由が約束されている。よくご検討なさって――――」
「――嫌だね」
間髪いれず、拒絶。その意志の持ち主は、見紛うことなく乾巧だった。
思わず固まる空気。今の今まで特に口出しもしなかった巧が口火を切るとは思わな

かったのだろう。皆が動きを静止させていた
　巧はそれだけ言うと、残り少ないカップに口を付けた。彼は答える気はなかった。興味は既に、目先の紅茶に映っている。
　あまりに一方的な回答に、茫然自失のガルド。一拍を置いて我に帰ると、取り繕ったように咳払い。次いで問う。
「し、失礼ですが理由をお聞きしても?」
　巧はカップを置いた。
「アンタの面が気に食わないから。俺が小学校の時に、勝手に黒板係にした奴と同じだ」
　空気、再び硬直する。
　唖然とする周囲の者たち。ガルドはその断られた屈辱からか、口の端を痙攣させている。まさか、そのような至極くだらない理由が拒絶の根源だとは、夢にも思わなかった。
　飛鳥も唖然とする中の一人だったが、何を想ったのかクスリと笑って口火を切る。
「そうね、そこの男に同調するようで大変不本意なのだけれど」
「おい、不本意なら言うなよ」
「私もジンくんのコミュニティで間に合ってるわ。私久遠飛鳥は、裕福な家も、約束された将来も、大凡他人から見たら……こんな言い方はしたくないのだけれど、『幸せ』と思える物全てを捨ててここへ来たの。たかが一地域を支配している組織の末端として迎

え入れてやる、だなんて慇懃無礼な誘いで満足するはずがないの。少なくとも、私はね。春日部さんはどうかしら？」

言いきると、飛鳥は今まで押し黙っていた耀へと視線を向けた。

「……別に。私はここに友達を作りに来ただけだから、どこでもいい」

「あら、なら私が友達一号に立候補してもいいかしら？」

無言。僅かな逡巡。その間に正装の少女の姿をマジマジと見つめた耀は、小さく笑って頷いた。

「……うん。飛鳥は私が知ってる女の子達とはちょっと違うから、平気」

「そう、良かった。貴方も友達になる？」

飛鳥は小さく、少し気恥ずかしそうに笑った後に巧へと声を掛けた。

彼はぶっきらぼうに、

「お前みたいな奴と友達になんて死んでもごめんだね」

「あらそう。別に良いわ、そんなに一人でいたいのならね。それにこっちから願い下げだわ」

「絶対巧って、前の世界で友達いなかったよね」

「それはあり得そうね。大方、小さい頃なんていつも一人ぼっちだったのでしょう。……可哀相に」

「ぼっちだったんだ。……かわいそう」
「人を憐れみの目でみてんじゃねェ!!　あとぼっち言うなッ!!」
さっきの話はどこへやら、リーダー達そっちのけで盛り上がる三人。
全く相手にされなくなっていたガルドは、そろそろ怒りの許容量が越えそうなのか、両腕を震わせながら割って入った。
「お、お言葉ですが」
「黙りなさい」
少しでも反論をしようとしていた口が、少女の一言によって勢いよく閉ざされた。
皆が驚きで硬直する中、少女の異様に透き通った様な声だけが響く。
「貴方にはまだ聞きたいことがあるの。そこに座って、私の質問に答えなさい」
少女の言葉に力が宿る。
彼の本質的なところから見て、齢二十歳にも満たない少女の言葉に大人しく従うとは思えない。現にガルドの表情は、驚愕と屈辱で塗りつぶされている。それでも言うとおりに従って、ガルドはそのままイスに腰掛けた。
巧は両の目を大きく開きながら、ゆっくりと少女へと視線を移す。これが黒ウサギも言っていた〝ギフト〟という力なのだろうか。
「まず一つ目ね。貴方はこの地域を『両者合意』の上で支配したと言っていたけれど、私

はギフトゲームは〝主催者(ホスト)〟と挑戦者がそれぞれチップを掛けて行うものだと聞いていたわ。ジンくん、それでコミュニティそのものを賭けるゲームなんてあるのかしら？」

「か、かなりのレアケースですが、稀に……」

「そうよね。箱庭の外界から来た私でもそんなことは分かるわ。だからこそ〝主催者権限〟を持つ魔王は恐れられている。でも不思議よね？　なぜその特権を持っていない貴方が、貴方の言う両者合意のはずのゲームで、コミュニティを賭けたゲームを続けられたのかしら。――――教えてくださる？」

ガルドの歯が、逆らおうとカチカチと鳴る。

しかし意思に反して、体が勝手に動く。恐らく彼女のギフトは、相手を従わせるギフトなのだろう。

彼の鋭い牙に塞がれた口が、開く。

「……きょ、強制させる方法は簡単だ。一番簡単なのは女子供をさらうこと。それでも応じない連中は周辺のコミュニティを従わせてからゲームをせざるを得ない状況に追い詰めていく」

「そう、中々堅実ね。それで？　そんな風に吸収した部下たちは貴方達に従ってくれるのかしら？　内部崩壊を起こすのがオチではなくて？」

「各コミュニティから数人づつ、女子供を人質を取ってある」
皆の顔が一変して苦々しげに歪まれた。巧も同じくである。
予想はしてはいたが、どうやらもっとどす黒いのはジン達のコミュニティではなく、ガルド達のコミュニティであるようだ。
これでは、なんらオルフェノク達とやり方が変わらない。
人間を襲うオルフェノク達は巧などのオルフェノクや人間を駆逐するために、ただ闘わず、人間として静かに暮らしていきたいだけのオルフェノク達を脅迫して刺客として送り込む手段を用いることもざらである。
今の幸せな生活を、家族にお前の正体を明かさないでおいてやる。家族を傷つけないでやる。だから自分たちに協力しろ。そうすれば、自分が化け物だと愛する人に知られないで済むぞ。家族を守ることができるぞ
その類の甘言で誑かして、突如として親切だった人が襲いかかってくることだってあった。ガルドは、今まさしく同じ類の行動を起こしている。それと同等のことをしている。
皆の中で人一倍嫌悪感を剥き出しにしている飛鳥が、感情を抑えた声音で問う。
「その人質に取った人達はどうしたの?」
「もう殺した」

コイツ、今なんていった？

『もう殺した』って言ったのか？　じゃあ、もうその人たちは。

巧は、怒りを感じるでも悲しみを感じるでもなく、とてつもない喪失感と脱帽感を感じていた。言い知れぬ悪寒が場を支配し、その者たちの口を塞ぐ。

しかしガルドだけが、命ざれるままに言葉を紡ぐ。

「初めて連れてきたガキどもは、泣き声が鬱陶しくて殺した。その次の次も我慢しようとしたが、やっぱり言え恋しさに泣き喚くから頭にきてやっぱり殺した。しかし身内のコミュニティにばれれば組織に亀裂が入る。だから死体は証拠が残らない様に腹心の部下に食わせて――――」

「黙れ」

音が反響するほどに、大男の口が勢いよく閉じる。

つまり今この時で働かせているかもしれない誰かたちは、この世にいもしない自分の家族の為に働かせているということになるのだろうか。

出来レースも甚だしすぎる。それでは彼らが耐え忍ぶ意味も何もない。理由すらない。それは、それではあまりにも救われなさすぎる。

しかし巧は、心の奥底からふつふつと湧き起こる物をガルドへと向けて吐き出すことなどしない。

その資格がないからだ。

家族の為に己が手を汚しても、オルフェノクでさえも、『人間』を守るという大義名分の為に灰へと帰したのだから。今の彼には、もしかしたら嫌悪感すら抱く資格すらないのかも知れない。

少し巧は、『アイツ』の気持ちが分かった気がする。

人間は――――生き物は醜悪である。

本能に従うまでもなく、快楽に素直で、欲望に忠実だ。驚くほどに。

誰かを貶めることも、他者の命を奪うことも、それ以上の地獄を他人に味わせることだってお茶の子さいさいである。

それこそが、生き物の、人間の『闇』。良い例が今目の前にいるガルドだろう。

だからこそ、『アイツ』――――人を守ろうとしたオルフェノクである木場勇治は。

人間のそんな醜い一面に絶望したのかもしれない。

しかしそれもあくまでも、人間の一側面に過ぎないのではないか。

現に目の前のガルドを糾弾する、見ず知らずの誰かの為に怒って、そして憎める久遠飛鳥がいる。それはとてもとても、素晴らしいことなのだろう。

人間は、必ず分かり合おうとする『心』がある。思いやる優しさがある。悪を許せない『魂』がある。

だからこそ、人間はそんな『光』を失わなかったからこそ、今も生き続けているのだろう。

人類の『光』の典型的な側面を顕わしたであろう少女は、つまらなそうに声を上げた。

「なるほど、素晴らしいわ。さすがは人外魔境の箱庭の世界、外道の格も修羅神仏級といったところでしょうか。……ねぇ、ジンくん。今の証言で箱庭の法が彼を裁くことはできるかしら?」

今の今まで放心していたジンは、飛鳥に質問されることでやっとこさ我に返り、真剣に返答する。

「……む、難しいです。勿論彼の行いは違法ですが……箱庭の外へ逃がしてしまえば、それまでです」

全てを捨てて、無様に生き長らえる。またそれも裁きと言えるだろう。

「そう」

少々苛立ったように指をパチン、と鳴らす。それによってガルドは、縛り付けられた

かのような感覚から脱却した。
次いで、激情に任せ叫ぶ。
「……っ、この小娘がァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ!!」
テーブルを叩き割り、ガルドの姿が豹変していく。
タキシードを破るほどに筋肉が膨張し、みるみる内に体が縞模様に変わって行く。
ガルドのギフトは、人狼に近い性質を持つ混在種、ワータイガーだった。
姿を変幻したガルドは、唾液を吹き飛ばしながら叫ぶ。
「テメェ……どういうつもりか知らねえが、俺の上にいるのが誰かわかってんのか！　箱庭第六六六外門を守る魔王が俺の後見人だぞ!!　俺に喧嘩を売るってことはその魔王にも喧嘩を売るってことだ！　分かってんのか、あぁ!?」
体を大きく見せながら吼える虎。
しかし少女には届かず、飛鳥にはその姿はとても滑稽に見えた。
「あら、誰かを使って脅迫？　貴方はさしづめ、虎の威を借る狐ならぬ、魔王の威を借る虎といったところかしら。ふふっ、ずいぶんと面白いわね」
可笑しそうにクスクスと笑う少女。
ガルドが爆発するには、十分過ぎる理由だった。

「この女ァ……八つ裂きにしてやるぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ!!!」

雄たけびを上げ、その凶爪を少女の首を撥ねんと振るう。巧は反射的に席を立ちあがった。そして飛鳥とガルドの線上に立とうと駆ける。

しかしそこで迷う、迷ってしまう。

ここで、オルフェノクの姿を晒してしまっていいのか、と。

一瞬、ほんの一瞬立ち止まった。その一瞬で、太腕から突き出された爪は秒足らずで少女へと迫る。

しかし、その爪が少女の首を撥ねることはなかった。

「喧嘩はダメ」

そんな無機質な声が響く。

それと同時に、どこから湧いて出たのかいつの間にか短髪の少女が割り込み、ガルドの太腕を掴み、どういうことかその巨躯を地面へと組み伏せた。

「ガッ……!!」

痛みと驚愕の声が上がる。
どうしてこんな小娘どもに自分が手玉に取られているのか、そう瞳が語っていた。
目の前でスプラッタな光景が広がらなかったことに、巧は内心ホッとした。
飛鳥は楽しそうに笑う、嗤う。
「さて、ガルドさん。もはや貴方には破滅以外の道は残されてはいないわ」
でも、と少女は一度区切る。
「私は貴方のコミュニティが瓦解するのを待つ程度では満足できる聖人君子ではないの。腐れ外道はボロ雑巾のような惨めな末路を辿ることをお勧めするわ。――――そこで皆に提案なのだけれど」
飛鳥は全員の視線を集めた。
そして彼女は、身の毛も弥立つほどの妖艶な笑みを浮かべて告げる。
「――――私達とギフトゲームをしましょう。貴方の〝フォレス・ガロ〟存続と〝ノーネーム〟の誇りと存続を賭けて、ね」

……勝手に決めんじゃねぇよ。

めんどくさがりな巧は、実直にそう思った。

渦巻く疑念は灰色で

時刻は日が沈みかけてきたといったところ。

夕暮れ時の噴水広場のペリペッド通りに、今さっき逆廻十六夜を〝世界の果て〟から連れ戻して、ジン達と合流を果たした黒ウサギの絶叫が響く。

「な、なんであの短時間で〝フォレス・ガロ〟のリーダーと接触して喧嘩を売る状況になったのですか!?」「しかもゲームの日取りは明日!?」「それも敵のテリトリーで戦うなんて！」「準備の時間もお金もありません！」「聞いてるのですか三人とも！」

「「ムシャクシャしてやった。今は反省してます」」

「やかましいのです!!」

お前らなんで息ぴったりなんだよ。打ち合わせでもしたのか。

すがすがしいほどの言い分を述べる容疑者三人――内一人はとぼっちりと言えなくもないが――に対して、乾巧は内心一人ごちる。古今の犯罪者達でもここまで開き直り

はしないだろう。
ガルドとの一悶着を終えたその後、久遠飛鳥が啖呵を切って取り付けたギフトゲーム。
そのことを勝手に勧められたのが黒ウサギの腹に据えたらしく、こうして彼女が説法を説いているわけである。
「巧さん！　なんで止めてくれなかったんですか!?」
怒り冷めやらぬと鼻息を荒げる黒ウサギの怒りが巧に飛び火する。
彼は面倒くさそうに、
「コイツらが勝手にやったんだよ、俺は関係ないね」
「あら？　随分と姑息ね、一人だけ言い逃れようなんて。貴方だってあの外道が気に食わないって言ってたじゃない」
「それとこれとは別だっての。俺はあの紳士ぶってる虎が気に食わなかっただけで、何もお前らと仲良くそのギフトゲーム？　ってのをやるつもりなんて無かったんだ」
話してはいないし、話すつもりはないが、今ここで面倒事に巻き込まれるのは巧としてはハッキリ言ってごめんである。元来のめんどくさがりが顔を出したせいもあるが、黒ウサギの話によれば直接的に武力を競い合うゲームもあるという話だ。そんなものにかまけている暇も命もない。

ただでさえ寿命以外での危険要素がぐーんと増えたところにこさせられたのだから、少しでも生存率は上げておきたいところだ。

――――それに、一番の厄介事も残ってるしな。

「……では、貴方はあの虎が何をしようが、目の前で人を喰い殺そうがどうでもいいって言いたいのね？　それで他の人たちが傷つく結果になったとしても？」

「……別に、そういうことを言ってるわけじゃねぇよ」

ただ、と巧は親指で後ろの黒ウサギとジンを指差し、

「俺はこいつらのとこが信用ならねぇから、勝手に俺をその〝ノーネーム〟って枠に入れるなって言ってんだ」

ジンと黒ウサギに衝撃が走る。

まるで雷にでも撃たれたかのような、瞳孔を大きく開いて巧に視線を向ける。その本人は、鋭い威圧を乗せた視線で睨み返す。

彼の態度で二人は悟る。なぜ彼が自分たちと同所属扱いされるのを嫌うのかを。とげとげしい雰囲気を隠しもせずに噴出させているのかを。

故に内心の苦悶が表出する。歪めた顔を必死に押さえつけ、黒ウサギは向き合う。

「……コミュニティのことを、黙っていたことに関しては深くお詫び申し上げます。申し開きをすることもできません」
「だろうな。まぁ『入る』って言っちまった手前だから仕方がねぇし、別に騙されることはどうでもいい。慣れてるからな。ただ俺はコイツらのコミュニティって組織が崖っぷちなんて話は聞いてない。そういうのは事前に話してもらうモンじゃねぇのか？」
「それは……」
「それに本当はお前、元の世界に帰る方法を知ってるんじゃないのか？　人出が足りないから嘘くらい突くよな。俺としてはこんな世界に長居するつもりなんてねぇし、帰れる方法を探すのに崩壊寸前の組織なんてまっぴらごめんだ。ハッキリ言って迷惑なんだよ。入るにしたって、協力するなんて俺は嫌だね」

吐き捨てるような物言いの巧。ただただ図星を突かれるがままの黒ウサギ。隣のジンもぐうの音も出ない様子だった。
それに引っかかるものがあったのか、はたまた自責の念が表情に表れるまでになった二人を見ていられなくなったのか、久遠飛鳥が口と目を吊り上げて意義を唱えた。
「ちょっと！　さっきも言ったけど、何もそんな言い方をしなくてもいいんじゃないの？　確かに隠していたことは悪いことだと想うけど、彼らだって何も良心がなくてした

ことじゃない。それなりの事情ってものがあったのだし、そういうところも考えるということもできないわけ!?」
「うっせぇな！　ンなことは最初っから分かってんだよ！　それにしたって俺からしてみればこのままハイそうですかって入るわけにはいかねぇって言ってんだ!!」
　語気を荒げて言葉が飛び交う。お互い、さきほどのやり取りもあってかどうやらフラストレーションが溜まりにたまっていたご様子で。段々と目が据わり、身に纏う雰囲気が硬質且つ鋭利になっていく。
　そろそろ止めなくてはまずいことになりそうです……！
　黒ウサギの背筋に嫌な汗が流れる。追求されている立場なので聞く耳を持ってくれるか分からないが、この場で色々始めてもらっては困る。しかし状況は、彼女の不安の斜め上を滑空していった。
「だとしても！　もうちょっと柔らかく断るとか、そういう言い方ができないのかしら!?」
「一々うるさいんだよお前！　大体なんだよ、俺がどう断ろうがお前には関係ねぇだろうが！」
「な、なんですって……！　人がせっかく――――」

「頼んでねぇっての！　このお節介女！　バカ女！」
「なっ――――」

あ、あれ？　段々話の軌道が逸れてきてませんか？
さきほどの鋭いナイフのような雰囲気から一転、なぜかそろそろ止めなければ酷くバカらしいことが起こりそうな予感を俗に言う第六感で感じ取る黒ウサギ。
彼女のウサ耳が不安げに揺れ、周囲がどうにも展開を掴めかねているところに、事は起こった。
「バカ！　アホ！」
「あ、貴方ねぇ……！　子供じゃ――――」
あるまいし、と飛鳥が続けることは阻まれた。巧は二の句も許さぬ猛威を舌戦で振るう。
「バカバカバーカ！」
その幼稚な罵詈雑言の羅列に飛鳥は絶句し、頬を紅潮させた。彼女が生きてきた中でここまで言われたのは初めてである。しかも巧の悪口は留まるところを知らず、更に彼女の自制心を削り取るワードが繰り出されることとなった。
曰く、宇宙よりも高くつまらないプライドを持った女だ。

曰く、一々口うるさい小姑みたいな女だ。
曰く、絶対に結婚できたとしてもすぐに離婚する性質だ。
曰く、小さな親切大きなお世話を体現したような女だ。
そして極めつけに乾巧は爆弾をぶち込んだ。
「ブス！」
ブチリ、と。
今の今まで生まれながらに教育されたお嬢様気質でどうにか堪えていたものの、どうやら生涯ここまで虚仮にされた人生は初めてらしく、とうとう久遠飛鳥の理性は決壊を迎えてしまった。
彼女は少しとは言え自信を持っていた容姿に泥を塗られ、屈辱に顔を熟れた林檎のように真っ赤に染め上げると、口をへの字に結んで反撃を開始した。
女の子に『ブス』なる単語は禁句というのを、デリカシー皆無な巧が知る由もない。
「言ってくれるじゃない……！　この仏頂面！　不良男！」
「高慢女！　メス猫！　バカバカバカバカバカバカバカバカバカバーカ！」
「こっ、この……！　バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカバカ！」
「バカバカバカバカバカバカバカバカバカヴァァァァァァァァァカッッッ！！！！」

「バカバカバカバカバカバカバカバカバカバカァアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!」
もはや目も当てられない光景だった。
他の〝ノーネーム〟一行は――あの逆廻十六夜でさえ――呆れて物も言えない罵声が噴水広場に響く。
バカをバカにするバカという、もはや最近の小学生や幼稚園児でも使わないであろう古すぎる舌戦を数分にも及ぶまで繰り広げた後、ようやく〝ノーネーム〟で随一の常識人である黒ウサギの意識が帰還する。
「ちょ、ちょっとお待ちをお二人様！　不毛な言い争いはやめてくださいっ！　何より恥ずかしいですからっ！」
対してまだまだ言い足らないのか、猫舌男の舌の矛先はウサ耳少女に向けられた。
「バカウサギ！」
「誰がバカですか誰がっ！　バカって言ったらですね、バカって言ったほうがバカなんですよこのお馬鹿様ぁっ！」
止めに入ったんじゃねぇのかよ、黒ウサギ。
この時。
珍しく、彼にしては非常に珍しく。逆廻十六夜の心の中で『ツッコミ』なるものを実感した瞬間であった。

■　■　■　■　■　■　■　■

結局のところ、二人の言い合いに黒ウサギも混ざることになって喧嘩は悪化の一途を辿ることとなった。数時間を要する長い長い凄まじい闘い（笑）は、体力の大幅な消耗により理性を取り戻した黒ウサギによって中断されることとなり、事なきを得たので一件落着……とまではいかないものの、取りあえず非生産的な争いは避けることに成功した。

「……し、信じられない。女の子に、あそこまで、言うなんて……」

「本当、です……巧さんは、もう少し、女の子の気持ちをですね……ハァ……」

「うる、せえ……」

肩を大きく上下しながらもまだ悪態をつきあう一人の男と二人の少女。傍らで今までの惨状を目にしてきた一行はもう介入することを諦めたのか、傍観を決め込んで口も手も出さずにいた。

しかしそこはやはりこれ以上は不毛と感じたのか、黒ウサギが大きく深呼吸をして息を整え、話の軌道を本題へと移す。
「……ええっと。大分話が逸れてしまいましたが」
「お前のせいだろ」
「貴方のせいよ」
「大分話が逸れてしまいましたがっ!!!」
未だ止まらぬ二人を語気を強めて諌めると、今度こそ本当に黒ウサギが話を修正する。
彼女は咳払いを一つして、
「……つまり巧さんは、私たちがコミュニティの惨状を黙っていたことがお気に召さず、そんなところには入りたくない。そう仰っているわけですね」
「……まあ、間違っちゃいねえよ」
「そしてそんなところには居たくない。協力なんてもってのほかだ……と」
「正確に言うとだな。別に黙ってたことはどうでもいいって言っただろ。そうじゃなくて、そんなところに入って帰る方法が見つかるのかって話だ。更に言えば、お前達が本当なら帰る方法は知ってるってこともあるかもしれないって思ってる。だって、それを教えたら俺が真っ先に帰っちまうかもしれないから」

黒ウサギの表情が再び歪む。巧が視線を回すと、ジンも同じような表情を作っていた。

そのことが巧の中で確信を生む。疑問がなくなり、それが確定するに足る証拠となる。

「で、だ。率直に言えば俺はアンタらが信じられない。さっきの約束だって破られる可能性だってあるかもしれねえからな」

つまりは〝ノーネーム〟は信用するに値しない。背中を預けられない組織に協力するなんてことはできないから、自分勝手に動くと考えているのだ。それ以上は何もしない。求められても、決して動くことはしない。そう巧は考えていた。もしもここで帰る方法云々を教えてくれなければ、一言も言わずに立ち去ろうと巧は決めていた。

先ほどよりも言動には出ていないが、嫌悪感を露わにした巧の雰囲気を感じ取った黒ウサギ達は息を飲む。そして押し黙る。彼がここまで拒絶しているのならば無理強いはできない。彼らはあくまで勧誘している側であって命令する権利はどこにもない。だから巧が『抜けます』とでも言えば『はいどうぞ』の二言で了承しなければならない。

「……どうしたよ、なんかねえのか。ねえんだったら――――」

「まあ待てよ」

巧の言葉を遮る声が一つ。邪魔されたと感じた巧は、不満を乗せた瞳をその主へと向

ける。
　その視線の先にいる逆廻十六夜は、ニヤニヤと軽薄な、掴みどころのない笑みを浮かべていた。
「……なんだよ」
「いや、別に。ただ俺はお前が何をしようとしているのか。なんで帰りたいのかも知らねえが、もしお前がここで抜けたり、もしくは抜けないまでも協力をしないってことになったらそれは結構デメリットになるんじゃねえか？　ってことを言いたいのさ」
「……あ？」
　怪訝な表情を作る巧。十六夜の言う『デメリット』が、巧自身に対してか〝ノーネーム〟に対してか。それを図りかねたからだ。
「まずお前が抜けるとしよう。だが今からコミュニティを探して入れるとは限らない。ましてやこの近辺はお前が気にくわない〝フォレス・ガロ〟の傘下がほとんどだ」
「だから、別に抜けるなんて言ってねえじゃ――――」
「まあ聞けよ。まだ続きがあるんだ。それで次にお前が〝ノーネーム〟に入ることとなった。だがお前は信用ならない組織には協力したくない。つまりはほとんど一人で動きたいってことで良いのか？」
「……まあ、一応な」

巧が納得がいかなそうに頷く。十六夜がその軽薄な笑みを更に深くした。
「さて、じゃあここで問題です。もし〝ノーネーム〟が、お前を異世界へと返す方法を探すことを最優先目標の一つに加えて行動したとしたら、一体お前はどうするでしょうか？」
ピタリと。
乾巧の動きが、僅かの間完全に停止した。十六夜の言葉に明確な反応を示すことができなかった。思考が停止したからだ。
一秒か数十秒か、そのどちらかとも言える短い間に訪れた沈黙。その後に我に返った巧が、口を開く。
「……どういう、意味だ」
「分かんねえか？　つまりは黒ウサギ達はこう考えていたわけだ。『コミュニティの状況を黙っていたお詫びに、巧さんを逸早く元の世界へと帰れるように努力しよう』ってな。……だよな黒ウサギ？」
「はっ、はい」
「それに俺達はコミュニティを再建するっていう目的がある。つまりはそこらかしこのギフトゲームだけじゃなくて色々と飛び回んなくちゃいけない可能性も十分あるって言う話だ。しかも昔はここらへんで有名だったって話じゃねえか。もしかしたらそう

いうツテとかも使えば案外速く帰れるかもよ？　加えて安心しろ。情報とかだったら俺が集めてやる。神様を普通にブッ飛ばせるこの俺がな」

黒ウサギは目を大きく見開き彼を見る。だが十六夜は振り向きもしなかった。

確かに黒ウサギは似たような考えを持って、どうしようかと思案はしていたのだが、十六夜のようにコミュニティ総出をもってして乾巧を支援するなどという案は考えもつかなかった。

ハッキリ言うと、帰る方法は知っているがそれを行うだけの力は彼女にはない。この世界から別の世界へと行くためには、もっと別の強大な力が必要なのだ。

だが十六夜はそれらを今の会話と黒ウサギの人となりから見抜き、更に彼女たちにとって限りなく良い方向へと向かうように発展させて見せた。何とも柔軟且つ回転の速い思考で、鋭い洞察眼である。

十六夜はそれを悟らせまいとしているのか、黒ウサギ達には目も向けない。ただ巧に視線を注いでいる。彼の視線を浴びる仏頂面の巧は、目の前の少年を睨みつけながら吟味する。

確かに黒ウサギ達が帰る方法を知っていないという線も捨てきれない。だからこそ、そうやって必死になって探すことを考えているのかもしれないこともまた然り。なら

ばこの男が言うことも一理あるだろう。
　なんか掌で転がされてるみたいで気に食わねえが。
「……本当なのか」
「ああ。ま、意訳は入ってるが概ねそんなところだ。少なくとも、この〝箱庭の貴族〟様は献身的だっていう童話が入ったお墨付きだしな。それでも信用できないってんならどことなりとでも行けばいいさ。ただ俺はこんな選択肢があるぜって言ってるだけだ。まあ神様をブッ飛ばしたってのは本当だし、〝箱庭の貴族〟がいれば色々と情報網とかにも余念がないっていうには事実だが」
　まあ、お前がどんな奴かも興味があるってのもあるしな。
　そこだけはおくびにも出さない。心の奥底にしまいこむ。
　未だ笑みを崩さない、彼からすれば真意が読めず気色の悪い笑みを浮かべる十六夜と、その周囲でビクビクとしたものを感じさせる少女と少年を交互に見る。
　十六夜が言う神様をブッ飛ばしたというのはなんとなく胡散臭い気もするが、実際危険な場所へと行ってケロッとして帰ってくるあたり相当な実力の持ち主とみていいのかもしれない。
　黒ウサギがさっき言っていた〝箱庭の貴族〟というのもまあ確かに有効そうだ。実際、あの虎の似非紳士が勧誘していたわけだから。

それらのことを深く考えている巧。情報を頭の中で並べ立て、もう一度整理したうえで。

「……ハア」

深々とため息をつく。

呆れたような、疲れたような表情で後頭部を掻きながら、

「分かったよ。入る、入ればいいんだろ」

投げやりな返事。やけくそと言ってもいい。

だがその返事は、場の空気を変えるのに十分すぎる効力を持っていた。頑固で意地っ張りな猫舌男の明確な『ＹＥＳ』の返事を聞いた黒ウサギ達は、今までどんよりとした曇天雲のような表情から一気に晴れ晴れ晴天のような明るさを持った笑顔に早変わりする。

「い、いいんですか!?」

「……ただし、少しでも怪しいとか思ったら即刻抜けるからな」

「ＹＥＳ！　その点については大丈夫なのですよ！　私たちのコミュニティには子供しかいませんから！　そういった陰謀とは無縁なのです！」

なんだそりゃ。本当に大丈夫なのか。
十人が見れば十人が見惚れるであろう笑顔で告げられた衝撃の事実に、速くも嫌な予感しかしない巧である。
喜びを分かち合う黒ウサギとジン。それらを半信半疑の感情で眺める巧とは真逆に、十六夜を除く他の異邦人たる少女達はホッと息を吐いた。
「……一時はどうなることかと思ったわ。私、ああいう空気は苦手なのよね」
「本当、貴方は色々と疑いすぎ。事情があるのは分かるけど、そんなんじゃ身が持たないと思う」
「うるせえよ」
「ヤハハハッ！　素直じゃねえなぁオイ。この俺が付いてんだ。もっと喜べよ」
「何様だよ」
「十六夜様だぜ。以後よろしくな乾くん」
自身のペースを乱さない十六夜。全くもって底が見えない問題児に巧は舌打ちする。なんとなく、嫌な奴だと思ったのだ。
速くも異世界の住人達と一悶着を起こした乾巧は、大天幕に覆われた空を仰ぎ見ながら思う。

……こんなんで帰れんのか？

天照す白陽

「――――さて。不慮の事故続きで色々と予定が狂ってしまいましたが、狂ったなら狂った分だけ対処しなくてはいけませんね」

仕切り直すように、黒ウサギが手に水樹――十六夜が、水神様を叩き伏して手に入れたギフト――を持ち直しながら切り出した。

皆の視線が彼女へと集中する。彼女はジンへと向き直った。

「ジン坊ちゃんは本拠へとお帰りください。巧さん達のゲームが明日なら、〝サウザンドアイズ〟に皆さんのギフトの鑑定をお願いしないと。この水樹のこともありますし、まあ十六夜さん一人でも楽勝でしょうが、準備はしておくに越したことはないでしょう」

「何言ってんだ？」

「そうだぞ。乾はともかく俺は参加しねえよ？」

お前も何言ってんだ。なんでそんなことになってんだ。

そんな言葉が出かかるも、呆れ過ぎて言うことも憚れた。何時の間にやら、巧が出ることが決まっていたらしい。

しかし巧は断固拒否する。そも彼は、このゲームをやることこそがバカバカしいのだ。それは億劫だからではなく、ソレそのものが自己満足でしかないから。

〝契約書類（ギアスロール）〟――何でも、〝主催者権限〟を持たない者たちがギフトゲームを開催するのに必要なものなのだとか――に記されている記述は以下の通り。

『参加者（プレイヤー）が勝利した場合、主催者（ホスト）は参加者の言及する全ての罪を認め、箱庭の法の下で正しい裁きを受けた後、コミュニティを解散する。主催者が勝利した場合、参加者は主催者の全ての罪を黙認する』

これが茶番に思えてならない。飛鳥の『自分の手で』という気持ちは分からなくはないが、リスクを負ってまでするというその執着がピンとこなかった。

馬鹿じゃねえの？　なんてことを口任せに言ってやりたいが、それでまた面倒なことになるのは御免なので黙っておく。

自堕落男の心情などは知らぬ存ぜぬ。少女は慌てふためく。

「なっ、何を言い出すんですか!?　というかなんで巧さんまで!?」

「そんなもん、他人様の喧嘩に手を出すなんて無粋だからに決まってんじゃねえか。その喧嘩はコイツらが売った、そして奴らが買った。なら俺は傍観すべきだろうが」

ぐっ、と黒ウサギは勢いを削がれた。一理あると、納得できてしまう自分がいるからだ。

飛鳥達の自主性を尊重し、彼女達の力だけで勝つことは大切なことである。
「……た、巧さんは!?」
「メンドクサイ。なんでそんなことしなきゃいけねえんだ。ダリィったらありゃしねえ」
「どこの無職者ですか!?」
怒りどころか呆れと驚きが顔を出した。だが巧は知らんぷり。そっぽを向いて聞く耳持たぬ。
その態度に益々ムキになる黒ウサギ。口をへの字に結んで再度説得を試みる。
しかし、彼女はふとハッとなってそれを思いとどまる。彼が出たがらない理由に心当たりがあったからだ。
そうであった。確かどういうわけか巧には、余命が少ないという事実があったのだ。本人が話したがらない故に全て推測するしかないのだが、黒ウサギは巧が不治の病に侵されているのだと思っていた。だから、ゲームに出たくないのだと。
「……巧さん。本当に出たくないんですか?」
「ああ、出たくないね」
「もしかしなくても、巧さんが動く必要があるゲームは多分出てこないと思いますヨ?」
「嫌だ。動きたくない」

これも一種の建前だと、黒ウサギは想定する。自分が病を患っているのだと悟られたくないが故の。

尤も、彼の短命化はオルフェノクになった際の副作用的なものであるのだが、彼女が知る由もなく、黒ウサギは、ここで病状を悪化させても本末転倒であるとして、仕方なく説得を断念。その代わりとして、小さく嘆息した。

だが、そう事が易々と事が運ぶはずもなかった。

「いいじゃない黒ウサギ。出たくないんだったら無理に出さなくても」

横合いから、飛鳥が優しく黒ウサギの肩に手を置いた。巧の事情と、きょとんとした顔の黒ウサギの思考を知りようもない彼女は、異様に落ち着いた声音で、

「元々私たちが取り決めたゲームだし、確かにそこの男はいるだけでほとんど何もしていないわ」

たまにはいいこと言うじゃねえか、ありがとよ傲慢女。

心の中で毒づきながら、感謝の言葉を巧は述べる。この時だけは、飛鳥に毛の先ほどだけありがたみを感じていた。

尤もそれらは、次に彼女から放たれた言葉によって、とてつもなくくだらない感情に変わっていくのだが。

「――――それに、臆病風に吹かれた小心者が居たら、勝てるゲームも勝てなくなってしまうわ。だったら彼には臆病者らしく逃げてもらった方がみんなのためというものよ」
フフンと鼻を鳴らし、目線を高くして双眸に男を映す少女。明らかに侮蔑の色が帯びた声音であり、視線にも嘲笑が混ぜられているのがよく分かる。挑発としては上等のものだ。
飛鳥の言動によって、黒ウサギの背筋を塩分を含んだ水が滴る。恐らくは、先ほどの罵詈雑言の仕返しであろう。意外と根に持つ女の子だったらしい。
しかし、このままでは結果は日を見るよりも明らか。
何故だか馬が合わない二人である。またもや収拾に労力を割くドンパチを初めてしまわぬよう、飛鳥に巧の事情の弁明するべく、黒ウサギは動く。
「……あ、あのですね飛鳥さん。これにはちょっとした訳が」
だが。
運命の神は、少女を見捨てた。
「誰が臆病者だッ!!!」
兎少女のなけなしの努力は、猫舌男の威圧を纏う怒声によって水泡に帰す。
ひゃっ、と短い悲鳴を上げて黒ウサギは仰天する。恐る恐る首を捻れば、件の男は青

筋を立てて大人げなく鼻息を荒げていた。
実はというと、久遠飛鳥の言葉は、乾巧の数ある欠点の内の一つを確実に抉っていた。
では、ソレは何か。
それこそが、乾巧はジャンケンと挑発には死ぬほど弱いという事実。
ジャンケンでは連敗し、勝負を回避しようとしても相手方の簡単な挑発に乗り、そして敗北の無限ループ。以前それらを熟知した同居人の少女に逆手に取られ、あらゆる面倒事を押しつけられたものだった。簡潔に言えば子供っぽくて単純なのだ。
しかも本人は自覚しているにも関わらず、面倒くさがって改善する姿勢さえ見せないので、直る兆しは一向に見えずじまい。今回も結局、意図せずとは言え飛鳥の挑発にまんまと乗った巧は、目の前の女の子にだけは見縊られることは我慢ならないので、大々的に宣戦布告。
「いいぜ！　そこまで言うならやってやろうじゃねえかッ！　後で吠え面かくんじゃねえぞッ!!」
「あら、それは楽しみね。貴方が一体どんなことをしてくれるのか、期待しないで待ってるわ」
……もう好きにしてください。
もはや本人が良いならそれでいいか、と黒ウサギは自棄気味に匙を投げたのだった。

しかし彼女は巧が抱える問題について吟味しながら、密かに小首を傾げた。
――――しかし、巧さんのは御病気ではないのでしょうか？　動いても問題なさそうに見えましたが。

■　■　■　■　■　■　■　■

意外にもあっさりと解決したところで、ジンを本拠へと返した一行は石造りの道を歩いていた。さきほどの黒ウサギの言葉の中に出てきた〝サウザンドアイズ〟と名の付く場所へと案内するためらしい。
「〝サウザンドアイズ〟は特殊な〝瞳〟のギフトを持つ者たちの群体コミュニティ。箱庭の東西南北・上層下層全てに精通する超巨大商業コミュニティです。私たちが向かっているのはその支店の一つです。そこで皆様のギフトの鑑定を行ってもらいます」
「何だよ、そのギフトの鑑定ってのは」
「勿論、ギフトの秘めた力や起源などを鑑定することです。自身の力を正しく把握すれば、引き出せる力はより大きくなります。皆さまもご自身の力の出所は気になるでしょう？」

黒ウサギが言うが、巧は然したる興味は沸かなかった。
起源がどうした。他人が評価が何だ。そも自身の力の正体が何であろうが心底どうでもいい。強いて言えば自分が力を得た理由があるのならば、少しばかり興味があるが、それも微々たるものだ。
この力がなんであれ、自分は一度死に、更に未練がましくこの世に残り、『アイツ』を含む多くの命を奪った事実は変わらないのだから。
どんなことを知ろうが、人殺しの人間だという真実は、変えようがない。
いや、もしかしたら他の人間に正体を知られたくないだけかもな。
そこまで考えたところで、前方に青い生地に互いが向かい合う二人の女神像が記された旗を立てる一つの商店が見えた。アレが例の支店なのだろう。
「……ハア」
来ちまった、などと嫌悪しながら嘆息。
面倒くさがりの巧は、様々な事情抜きでここへの来訪を拒んでいるのだが、ここへ来なければそれはそれで今以上に面倒になる。それだけは御免である。
渋々皆と共に商店の方角へと歩を進める。すると、店の暖簾を潜って割烹着を着た、店の店員らしき女性が現れた。
彼女は店の看板をいそいそと下げ始めた。恐らくは閉店時間なのだろうが、当然鑑定

の目的があるので黒ウサギは困る。非常に困る。彼女は待ったを賭けるべくして慌てて駆けだした。
「まっ」
「待ったなしですお客様。うちは時間外営業はやっていませんので」
　取り付くシマもねえな。
　あまりの対応にすがすがしささえ覚える。さすがは超大手の大企業コミュニティ。クレーマーに慣れたエリート会社を彷彿とさせる対応だ。
「なんて商売っ気のない店なのかしら」
「ま、全くです！　閉店時間の五分前に客を締め出すなんて！」
「文句があるならどうぞ他所へ。貴方達は今後店への一切の干渉を禁じます。出禁です」
「出禁!?　これだけで出禁とかお客様舐め過ぎでございますヨ!?　お客様は神霊様でしょう!?」
　がなる兎少女。彼女を陰鬱な眼で見つめる女性店員の気持ちが、巧にはなんとなしに分かる。同情はしないのだが。
「なるほど、〝箱庭の貴族〟であるウサギのお客様を無碍にするのは失礼ですね。よろしければコミュニティの名をお聞かせ願えないでしょうか？　中で入店許可を貰って

参りますので」

「……う」

黒ウサギ、言葉に詰まる。代わるように、十六夜の口から事実が述べられる。

「俺達は〝ノーネーム〟ってコミュニティなんだが」

「どこの〝ノーネーム〟様でしょうか。よかったら旗印を確認させて頂いても？」

十六夜も黙り込む。

傍観していた巧は、目つきの悪い――あくまで巧の主観である――女性店員を見やりながら、ガルドが言っていたことを思い出して納得する。彼らの言う〝名〟や〝旗印〟がないことのリスクとは、こういうことだったのだろう。その上で想う。

ネチネチネチネチ、分かってる癖に聞いてきやがって。この女相当性格捻くれてんな。

自身に跳ね返ってくるであろう言葉を内心で呟く。見た感じだと、あのふてぶてしい態度などからして、大方『〝ノーネーム〟はお断り』という規定にでも従っているのだろうが、明らかに本心でも彼らを見下しているのが分かる。

巧はあからさまに不機嫌になった。さっさと立ち去りたい。しかし黒ウサギの事情もある。退くにも退けないので、どうするんだという意を込めて黒ウサギを睨む。十六夜達も同じなのか、皆の視線は自然と黒ウサギの元へと注がれた。

　彼女の表情が悔しげに歪む。次いで顔を真っ赤に染めると、震える唇で小さく呟いた。
「あの……その…………私たちに、旗はありま」
「いぃいぃいぃやっほぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおおお!!!　久しぶりだ黒ウサギィイイイイッ!!」
　突然の強襲。場には硬直が訪れた。
　いきなり白髪の着物風少女が爆走しながら出現したかと思えば、瞬く間に彼女は言い淀む黒ウサギにフライングボディーアタックをお見舞いして、勢いそのままに街道の向こうにある浅い水路まで吹き飛び水の中へと沈んでいった。残像が残るほどの速さである。
「……おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか？　なら俺も別バージョンで是非」
「ありません」
「なんなら別バージョンで」
「やりません」
　十六夜と店員が真剣な応酬を繰り返す。呆気に取られて動けない巧は、二人と今も水路の中で嬉しそうにたわわな胸部に頬ずりを繰り返す白髪の少女とを交互に見やりる。

「……またガキかよ」

疲れたように絞りだされた言の葉は、吹いた風に乗って消え去った。

■　■　■　■　■　■　■　■

「――――さてと」

白髪の少女は、巧達の目の前に腰を下ろしてパチン、と手に持った扇子を閉じる。

現在巧達は、少女の私室たる和室に招かれていた。いきなり強襲して黒ウサギにセクハラを働いた少女。彼女とのいざこざ……とも呼べなくもないやり取りの収拾をどうにか付け、更に黒ウサギとの面識があるらしい彼女がどういうことか店員を説き伏せ、紆余曲折を経てこうして今に至る。

「改めて自己紹介をしようかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構えておる〝サウザンドアイズ〟幹部の白夜叉だ。この黒ウサギとは少々縁があってな。コミュニティが崩壊してからもちょくちょく手を貸してやっている器の大きな美少女だと認識しておいてくれ。ついでにこれは粗茶だ。まあ飲んでくれ」

「あっ、これはどうも」

さり気なく気を効かせて、五人分の茶の入った湯呑を配る少女――白夜叉に、黒ウサ

ギは申しなさそうに頭を下げた。

彼女のことを、巧は初見で『侮れない』と評価した。

まず第一に、黒ウサギや店員が敬称で呼んでいたこともそうだが、どうにも食えないというか、底を読ませないような立ち回りが、巧の危機察知器官にそう思わせるのだ。一見すれば穏やかでも、近づき過ぎれば傷を負う太陽のように。

「……」

しかしそれはそれ、これはこれ。割り切って、目の前の物体を凄まじく凝視する。

言わずもがな、お茶は猫舌の天敵である。故にその登場に苦悶を露わにするも、ここで無碍にしても得はないので、取りあえずいつもの如く猫舌特製の天敵撃退作戦を開始する。

題して、フーフー大作戦。

隣で地味な作業が始まっていることもされ知らず、耀が小首を傾げて問う。

「その外門って、なに？」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に巨大な力を持つ者達が住んでいるのです」

「フー……フー……フー……」

中々に手強いお茶だ。一向に冷める気配がしない。ここはもっと息を強く吹かねば。

決断するが早いか、巧は徐々にお茶を冷ますことに没頭し始める。無論、目の前の話のことなどすっぽり忘れて。

実は箱庭は七つの層になってるだとか箱庭の見取り図はバウムクーヘンのようだとか、四桁以上になると人外魔境だとか結構大事な話をしていても、当然の如く頭に入ってこない。せいぜい単語の端々が耳を通り過ぎる程度だ。彼は強敵に絶賛苦戦中である。

そしてこれまた悲しいかな、誰も彼の愚行に、話に夢中で気付いてはいない。これぞ悲劇と言えよう。

「私たちが今いるここは、七桁外門の東のところに位置していてな。そのすぐ外にある〝世界の果て〟と向かい合う形となる。あそこにはコミュニティには属していないものの、強力なギフトを持った者たちが住んでおるぞ？　そこの水樹の持ち主などな」

白夜叉が、黒ウサギが手に持つ水樹の苗を指差す。巧の吐く息が更に強さを増す。だがまだ冷めない。

「して、一体誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？　知恵比べか？　勇気を試したのか？」

「いえいえ、この水樹は十六夜さんがここに来る前に、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

少しだけ自慢げな黒ウサギ。目もくれず、巧は未だ衰えを知らない緑茶を相手に格闘中。

「なんと!?　クリアではなく直接的に倒したとな!?　ではその童は神格持ちの神童か!?」

「いえ、違うと思います。神格ならば一目見ればわかるはずですし」

「む、それもそうか。しかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互いの種族によほど崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族でいうなら蛇と人ではドングリの背比べだぞ」

考え込むような仕草の白夜叉。未だ冷ますことに没頭する巧。少し湯気が収まってきた。

「白夜叉様はあの蛇神様とお知り合いだったのですか?」

「知り合いも何も、アレに神格を与えたのはこの私だぞ。もう何百年も前の話だがの」

呵々と豪快に笑う白夜叉。巧は息を少しばかり弱めた。もう飲めるかもしれない。

「へえ?　じゃあお前はあの蛇より強いってことか?」

「愚問だな。私は東側の〝階層支配者(フロアマスター)〟だぞ。この東側で並ぶ者がいない、最強の主催者(ホスト)なのだからのう」

「熱っ……」

まだ冷めていなかった。舌先に感じる少しばかりの熱に顔を顰めると、再び格闘が続行される。

「へえ……なるほど。最強の主催(ホスト)者か。そりゃ景気のいい話だ」

「つまり貴女のゲームをクリアすれば、私たちが東側で最強のコミュニティということになるのかしら?」

「無論、そうなるの」

「そう。それはよかった――――って」

そこでようやく、皆がその場の違和に気付いた。全員の茫然とした、もしくは呆れた眼差しが一人の男へと向けられる。

具体的には、耀の隣でフーフーうるさい男へと。

「……、」

「フー……フー……」

「……ねえ」

「フー……フー……あ?」

機嫌の悪そうな顔で振り返る。そこには、どういうわけか酷く感情が読み取れない瞳の飛鳥の姿が。彼女は問う。

「何してるの?」

「何って、みりゃ分かんだろ。冷ましてるんだ」
それがなんだ。当たり前のように憮然とした巧。
まるで自分が常識だとでも言いたげな男に、飛鳥の口の端が痙攣する。彼女は己の裡で今にも弾けんとするものを、一身で抑えつけながら、再度問う。
「……一応聞くけど、話聞いてた？」
「ああ、バウムクーヘンは俺も上手いと思う。なにより熱くないし、甘いしな」
その言葉が引き金となった。
面白い音をこめかみから発生させた久遠飛鳥は、青筋を立てると驚くべき迅速な手際で身近にあった湯呑を掴み、その中にある熱々の液体を巧の顔に向けてぶちまけた。
人類史上稀に見るほどの猫舌で、おまけに手の皮までぺらっぺらな薄皮の乾巧に堪え切れるわけもなく、顔面を押さえつけて悲鳴を上げる。
「うぐぎゃぁぁあああっ!!?」
「さ、猫舌男は放っておいて、話に戻りましょう」
「う、うむ……」
後ろでのたうつ巧も全く気にせず、笑顔で提案する飛鳥。同じく十六夜と耀も冷静である。

さすがの白夜叉もそれには顔が引き攣ったが、咳払いをして話の軌道を元に戻した。
「い、いやはや抜け目のない童たちだ。依頼しておきながら、私にギフトゲームを挑もうとは」
「え？　ちょ、ちょっと御三人様!?」
巧の惨状に呆気に取られ、今更ながらに焦る黒ウサギを白夜叉は右手で制する。
「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えておる」
「ノリがいいな。そういうのは好きだぜ？」
「そうかい。ところでそっちの猫舌は……まあ、後で聞くとするか」
チラリと横目で巧を見やる。のたうってはいないものの、涙目で痛々しそうに顔の茶をふき取っていた。ある意味自業自得である。
「まあ、参加人数は置いておくとして――――決闘の前に、おんしらに確認せねばならんことがある」
「何だ？」
白夜叉は着物の裾から〝サウザンドアイズ〟の旗印――――向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言。
「おんしらが望むのは〝挑戦〟か――――それとも〝決闘〟か？」

刹那、視界が暗転した。

■　■　■　■　■　■　■　■

それは衝撃的だった。あれほど大嫌いな熱さも、火傷の様な痛みも吹き飛ぶくらいに。

視界はとうに意味を失くし、巧の脳裏の中を様々な情景が駆け巡る。黄金色の稲穂が垂れ下がる草原、白い地平線を覗く丘。森の湖畔。見覚えのない場所が流転を繰り返し、足元から飲みこまれていく。そして放り出された場所は、白い雪原と凍った湖畔、加えて水平に太陽が廻る世界だった。

「……っ……!?!!」

十六夜達と同時に、巧が息を飲む。

まともじゃないと素直に感じた、戦慄した。まるで星一つを、世界一つを創り出したかのような奇跡の顕現。今まで見てきた怪奇な現象や、脅威に感じたオルフェノクが可愛く見えてしまうような文字通り人智を超えた力を、ひしひしと感じた。それほどのことを、あの少女は手軽にやってみせたのだ。

「今一度名乗り直し、問おうかの」

その本人の声が投げかけられる。

唖然と立ちすくむ四人の前に立つ少女は、薄明の空にある白い太陽を背に、問いかける。

「私は〝白き夜の魔王〟――――太陽と白夜の星霊・白夜叉。おんしらが望むのは、試練への〝挑戦〟か？　それとも対等な〝決闘〟か？」

これが例の魔王様ってか。思いっきり化け物じゃねえか。

巧は魔王の存在を再認識する。漠然としてしか掴めていなかったイメージを修正し、しっかりと己の脳に焼きつける。

同時に想う。自分では逆立ちしたって、世界が引っ繰り返ってもこの少女には勝てない。もしも挑んだとしても、この少女は鼻歌交じりに蹴散らすことだろう。それどころか、オルフェノクが数百万いたところでこの魔王には、万に一つも傷を付ける可能性すらないことが容易に分かってしまう。勝とうと想うこと自体が間違っている。

だが、同時にこうも想う。

これだけの強大な力を持っているのならば、元の世界へと帰る手段を知っているのではないか、と。

「〝挑戦〟を選ぶのならば、手慰み程度に遊んでやる。安心せい、命は保証してやろう。しかし〝決闘〟を選ぶならば話は別だ。魔王として、命と誇りの限り闘おうではない

か」

白夜叉に気圧されて黙り込む十六夜、飛鳥、耀。

希望的観測にも縋って、自身の望みを叶える可能性を持つ少女を睨む巧。

重苦しい空気が場を支配する中、星を背負う魔王は両手を水平に挙手。

「さあ、どちらを選ぶ？」

嗤う白陽を、望みを持って灰狼は睨みつけた。

刻まれし己が恩恵

暫しの静寂の後――――観念の胃を含んだ微笑と共に、唯我独尊を地で行く少年が両手を上げた。

「参った。やららえたよ、降参だ白夜叉」

へらへらと笑う快楽主義者。その行動は、自分たちが売った喧嘩を取り下げたことに対する意地のようなものだと、巧はなんとなしに想った。

「ふむ。それは決闘ではなく、挑戦を受けると取ってもよいのかの？」

「ああ、それでいい。今回はアンタの勝ちだ。黙って試されてやるよ、魔王様」

あくまで『試されてやる』と譲歩する十六夜の言葉を、白夜叉は喉の奥でくつくつと笑う。笑いを噛み殺しながら、他の者にも問いかけた。

「く、くく……して、残りの童達も同じか？　〝挑戦〟を選ぶか？　〝決闘〟を拒むか？　己の力量を見測るのか？」

「……ええ。私も、試されてあげるわ」

「右に同じ」

「そうか。なればおんしはどうじゃ？」
　最後に、離れた場所に立つ巧に問いかける。すっかり先ほどの熱さと痛みが吹き飛んでも、相も変わらず顰めっ面で彼は吐き捨てた
「冗談じゃねえ。誰がお前みたいなのと闘うかってんだ。それに試練とかいうのもやりたくないね。第一メンドクサイってんだ」
「これは随分な言われようじゃのう」
　少女、肩を竦めてくつくつと笑う。巧の態度に、気を悪くした印象は微塵も感じられない。
　しかし、紛れもない巧の本心であるのは事実だ。こんなところで必要もなく、意味もなく闘争をするのがばかげている。そんな瑣末ごとで、拾ったこの命を再び失うわけにはいかない。加えて試練などに参加するつもりも、一ミクロンも持ち合わせてはいない。
　彼の言葉を最後に、黒ウサギは安堵したように息を大きく吐き出した。
「も、もうお互いにもう少し相手を選んでください!!　〝階層支配者〟に喧嘩を売る新人と、新人に売られた喧嘩を買う〝階層支配者〟なんて、冗談にしても寒すぎます！それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか！」
「何？　じゃあ今は元・魔王様ってことか？」

「はてさて、どうだったかの？」
ケラケラと笑う星霊。巧の双眸の線が細くなる。
何千年とか、普通の人間ならば生物学上決して聞くはずのない単語が聞こえた気がした。彼女が人間ではないのは明白だが、そうなると、彼女の年齢を数字に換算すればとんでもないこととなる。
しかし巧は、妙に納得している自分を感じていた。目の前の少女の皮を被った何かの怪物性を察すれば、外見などはどうとでもなるのかもしれない。
そろそろ箱庭（こっち）の法則に毒されてきたな、などと辟易していた丁度その時、彼方にある山脈から甲高い声が響いた。
いの一番に耀が反応を示す。
「何、今の鳴き声。初めて聞いた」
「ふむ……あやつか。おんしらを試すには打って付けかもしれんの」
彼女が湖畔を挟んだ向こう側にある山脈に手招きをすると、呼応するように『ソレ』は現れた。
全長五メートルはあろうかという巨躯に、背中にはその体躯に匹敵する白き翼。異様ないでたちをしたその獣は、鷲の上半身と獅子の下半身を持っていた。
「グリフォン……嘘、本物!?」

歓喜と驚愕を露わにする茶髪の少女。いつもの彼女らしからぬ様子に、巧は意外なものを見たとばかりに鼻を鳴らした。

人形みてぇな面ばっかしてたが、こんな顔もするんだな。

「フフン、如何にも。あ奴こそ獣の王にして鳥の王。〝力〟　〝知恵〟　〝勇気〟を備えたギフトゲームを代表する獣だ。これからこ奴と共に、おんしらにギフトゲームをしてもらおうと思う」

自慢げに鼻を鳴らすと、少女は先ほどと同じ紋が入ったカードを懐から取り出す。

同時に、巧達の手元に虚空から輝く羊皮紙が現れた。彼らはそれの刻まれた文面に目を通す。

『ギフトゲーム〝鷲獅子の手綱〟

・プレイヤー一覧

・逆廻十六夜

・久遠飛鳥

・春日部耀

・クリア条件

グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う

・クリア条件
〝力〟〝知恵〟〝勇気〟の何れかでグリフォンに認められる
・敗北条件
降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合
宣誓　上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します
〝サウザンドアイズ〟印』

「私がやる」
誰かが申し上げる前に、耀が真っ先に名乗りを上げた。彼女は見るからに少し興奮気味で、目は玩具を見つけた子供のようにきらきらと輝いている。
『ニャ、ニャア?』
「大丈夫、問題ない」
「ふむ、自信はあるようだが……失敗すれば大怪我ではすまんぞ?」
「大丈夫、問題ない」
何が問題ないのか、何故猫と話しているのか。ついでになんでこんな危ないことをし

たいのか。
　その他諸々の疑問を抱きながら、巧は小さく嘆息する。
「……何？」
「何って、何がだよ」
「どうしてため息なんかついたの？」
　どうやら聞こえていて、それがお気に召さないらしい。普段は感情の起伏が伺えない瞳に、若干の鋭さが宿る。
　心底馬鹿らしく感じた巧は、しっしと小さく手首を払った。
「いや、別に。行けよ。さっさとあの訳わからん生物とお話してこいって」
「……もういい」
　私、不機嫌ですと示すが如く、風船を連想せる膨らみを頬に二つ造りだした耀は、三毛猫を黒ウサギへと預けると、ズカズカと大股でグリフォンの元へと歩んでいった。
　彼女らの会話を視聴していた他の者達は、またかこの男かと表情で物語りながら、巧へと語りかける。
「貴方って、本当に口が悪いわね。もっと『頑張れ』とか『無茶するなよ』とか、そういった思いやりというものが持てないのかしら。分かる？　思いやりよ」
「そうですよ巧さん。そんなことではコミュニケーションがうまくとれませんよ？」

「うるせえな。お前らにとやかく言われる筋合いはねえ」
不変な無愛想の塊に、女子二人がやれやれと首を横に振るう。その傍で、さぞ面白いとばかりに十六夜が微笑する。それを見て、更に巧は口を尖らせた。
突如、ひと際強い風が横顔を撫でた。顔を腕で覆いながらその方角を向けば、耀を背に乗せたグリフォンが地を蹴り、空を駆っていた。それ即ち、春日部耀のギフトゲームが、開幕の狼煙を上げたことに他ならなかった。

■　■　■　■　■　■　■　■

自身達の知らぬ間に進んだ状況に少々慌てながら、湖畔の方角へと飛翔した耀達の姿を注視する飛鳥達。
その中で、皆の輪から外れて行動する者が一人。
「――――おい」
「む？」
巧は一人、白夜叉の傍へと歩み寄る。彼女は酷薄な笑みを浮かべて首を傾げた。
「アンタに訊きたいことがある」
「何かね？」

凄まじく優れた聴覚でその声を拾った黒ウサギは、ピンと耳を立てて振り返り、訝しげに首を傾げると、そっと彼らへと歩みを進めた。

巧は、楽しそうな白髪の少女を、酷く無感動な眼で見つめる。

ここで聴くことは早計過ぎると危惧する自分もいたが、皆、眼前の少女の異常さに圧倒されて、または魅了されて重大なことに気付いていない。少女の持つ、重大な可能性に。致し方のないことと言えば、確かにその通りなのだが。

――だったら、自分で動くしかねえだろ。

協力してくれるのであれば、それもいい。だが彼らと巧では、最終的に見ているところが違う。彼は彼の目標を最優先するだけだ。それで理解されなくとも、それでも構わない。

息を大きく吐く。極限まで冷めた冷気が、それを白く視覚化させる。意図的に己を落ち付かせた巧は、背後で忍び寄る黒ウサギを察知することもせず、ただ己の目的を言葉にする。

「なあ、お前は世界と世界を行き来する方法ってのは知ってるのか？」

一瞬。

彼女の脚が、確かに静止した。

黒ウサギは、まるで心臓を鷲掴みにされたかのような、そんな衝動に襲われた。瞳孔さえも大きく開眼させ、男の後ろ姿を凝視する。息も、僅かに止まっていたせいで、少しだけ乱れていた。

巧の背後に見える、彼女の姿を見た白夜叉は、その変化に不可解だとばかりに顰めながら返答。

「なぜ、そのようなことを聞く？」

「アンタが、それを知ってそうだったからな。ここまで連れてこれたんだ。だったら別の世界へ飛ばすくらいわけないだろ」

「まあ、これは世界を移動させたというか、少し違うのだがな……しかし、なぜそれを知りたいのだ？　別の世界にでも行きたいのか？　ここへ来た際に、もう全てを捨てる覚悟はできていたはずだが？」

「知るかよ。俺は、手紙を開いて読んでたら勝手に呼び出されたんだ。来たくもないのにな。あっちでやることがあったってのに。全く、他人様の事情を考えて欲しいな」

ふむ、と唸る白夜叉。

確かに、彼女はこの箱庭世界と、外宇宙たる別世界とを繋げる方法はいくつも知っている。彼女自身がそれを行うことも可能である。今の彼女にはできないのだが。

しかし、それを安易に教えてしまっていいのか。理由も知らぬ輩に教えてしまってい

いのか。
困惑の色を乗せて、白夜叉は黒ウサギに視線を送る。気付くと黒ウサギは、戸惑うように目を伏せて、二つの耳を萎れさせる。豊満な胸の前で右手を握ると、暫しの間をおいて俊巡。静かに頷いた。
教えてあげてください。私達は彼を、組織的に支援するつもりです。
双眸が物語る意志こそが本心だと確信を得た彼女は、僅かながらに白い眉毛を上下させると、肺の中の酸素を大量に空気へと排出した。
「まあ、本当なら教える義理があるわけでもないのだがの。ここは黒ウサギの顔に免じて、教えてやらんこともないぞ」
「本当か!?」
巧の顔が、急激に希望の色に染まっていく。
いきなりの変化に彼女はたじろいだ。無論、黒ウサギも。
今の今までいつもつまらなそうだったこの男の顔面に、まさかここまでの光明が射すことになろうとは。白夜叉は戸惑いの色を浮かべながら、咳払いをして話を続行する。
「う、うむ。ここから特定の世界へと送りだすとなると、随分とまあ大がかりな術式になりそうだがの。まずその世界を見つけなければいかんからな。――――そうだな。〝奴〟の力を借りずに一人でやるとすれば、最低でも五年はかかるが、それでもよいかな

？」

淡々と告げられた年数。

それは、白夜叉にとっては当たり前で、箱庭にとっても当たり前で、常識になっていることで。

巧にとってはそれは、非常識にも常識外にも等しい桁の数字だった。巧は、死刑判決を告げられたような気分を覚える。視界に映る全ての景色が遠のいていくような、自らが遠ざかるような、そんなあり得ない感覚さえ知覚する。

間を置かずして、ふつふつと言い知れない熱を持った感情が湧き起こった。

「――ふざけんなッ!!!　そんなに待てるかッ!!」

堪えかねたように巧の罵声が飛ぶ。後何年、こうして息を吸えるか分かった物ではない彼に、五年と言う月日はあまりにも長すぎた。それほど悠長にしてはいられない。何せ、元の世界へ戻ってはいお終い、というわけでもないのだから。

苛立ちを表出させる巧。見かねた黒ウサギが慌てて彼に駆け寄った。

「お、落ち着いてください巧さん！　白夜叉様は何も、それだけしか方法がないとは言っておりませんっ！」

「じゃあ他にどんなのがあるってんだよ!?　時間もかけない、それで元の世界へ帰れる方法がッ!!　一体どこにッ!!」

感情の赴くままに、巧は怒声をばら撒く。
その刹那。
「――――〝クイーン・ハロウィン〟」
異様なほどに冷徹な声が、巧の鼓膜を叩く。思わず怒声を発することを止めてしまうほどの。
それが眼前の少女のものだと認識すると、巧は不満を混ぜた怪訝な眼で白夜叉を睨んだ。
「何だよ、それは」
「星の運行を司る星霊。太陽と黄金の魔王。クイーン。……まあその他諸々の色々な異名があるが、箱庭第三桁に属するほどの実力者にして私の仇敵、最強の召喚者だ。この箱庭の中の魔王において、奴だけがクイーンを名乗れるほどにな」
二つの眉の谷間が、更に深さを増した。先ほどから『クイーン』だの『星の運行』だのと単語を並べられているが、箱庭のことに関して無知にも等しい巧には、何のことかさっぱりだった。
理解が及ばないことを察しさせる表情の巧。その隣で、黒ウサギはヒステリックな声

を上げる。
「……彼女に頼めと。そう仰るんですか、白夜叉様!?」
「仕方あるまい？　今私は仏門から神格を与えられて、力を落しておるからできんしな。しかも、私は境界を操っているわけではない。ならば奴の手を借りなければならんだろう。〝クイーン・ハロウィン〟ならば造作もなくそ奴を送れるじゃろうて」
「で、ですが――――」
「おい、勝手に話を進めんな。こっちにも分かるように説明してくれ」
不躾な声音で割って入る。全くもって、乾巧は話しについていけていなかった。
黒ウサギはすいません……、と頭を下げると、講釈を始める。
「えっとですね、つまり巧さんが元の世界へ戻ることができ、尚且つ日を跨がないほど迅速で単純な方法なら確かにあります。数少ないながらも存在するなかで、その一つを握るのが」
「それがその〝くいーん・なんたら〟って奴か」
「〝クイーン・ハロウィン〟です。彼女は修羅神仏が跋扈するこの箱庭において〝三大問題児〟と称されるほどのお方です」
「分かり辛いのであれば……そうだな、さっきのおんしの言葉を借りて『今の私よりも数倍出鱈目な以前の私と同じくらいまともじゃない、見たまんまの化け物』とでも認

識しておいてくれ」
「……それで、その化け物が一体どうしたってんだ。ソイツが帰る方法を知ってるんじゃないのか？」
　ようやく話が飲み込めてきたからか、巧の声から棘が少しだけ抜けていた。顔は不機嫌を貫いているが。
　そのことを読み取った黒髪の兎は、少しだけ落ち着いた声音で、
「ええ、まあ。彼女ならば、人間一人特定の外界へ戻すことぐらい造作もないと思います。彼女は最強の召喚者ですから。ですが……」
　問題はそこなんですけども。
　黒ウサギは苦虫を噛み潰した様に言葉を詰まらした。不審に思った巧は再度問うた。
「なんだよ」
「……その、彼女であるならば問題はないと思うのですが、問題はどう彼女に頼みこむかです。まず彼女の本拠がある三桁に行くことから困難ですし、仮に行けたとしても、彼女が巧さんの頼みに応じてくれるかどうか……」
「奴はなかなかに横暴で我儘だからのう。その分法などを整えたりもするが、人間一人の、それも〝名無し〟の人間がいきなり『元の世界へ返してくれ』と言われたところで、鼻で笑われて袖にされるだけじゃろう。頼みを聞かせる唯一の方法がギフトゲームだ

が、おんしがあ奴に勝てるとは思えんしのう」
巧は、なんとなく理解した。彼女らの言わんとしていることを。
つまりは、その魔王はとてつもなく強力で強大で、目の前の少女と同等の存在である。だから、一見すれば何の力も持たない人間が、その魔王の元へと行けたとしても、言うことを聞かせるどころかむざむざ命を散らせるようなものだ。そういうことを言いたいだろう。
実際巧もその通りだと思うし、多分彼女たちの言っていることは正しい。謂わば蟻が天災に挑むようなものである。相対したところで、一呼吸することすらままならずソレは終わる。
その上で。

「分かった。つまりはソイツをどうにかして、頼みを訊いて貰えばいいんだな」
発せられた、一言。
二人の少女が、勢いよく振り返る。理解不能という文字が、顔面に幻視できてしまうほどの驚愕が、彼女たちの顔に張り付いていた。
「たっ、巧さんっ、話を聞いてました!?」
「ああ。ちゃんとな。来て良かったぜ。帰り方が分かっただけでも、今日は収穫だな」

「そっ、それはそうかもしれませんけど……ってそうじゃなくてっ！　クイーンに本当に挑むおつもりで!?　あの魔王に！　命を落とすだけじゃすみませんよ!?」
「かもな」
「なっ――――」
さらりと出た言葉に、黒ウサギは絶句した。揺れる瞳が巧の顔を捉える。彼も彼女を見ていた。
瞳の中に彼女を映しながら、黒ウサギがここまで必死になる理由を、巧は理解していた。
コイツはお人好しだ。本当、嫌になるくらいにお人好し。
『世界中の人間を幸せにしたい』と大真面目に言ってのけた、洗濯屋を営む知人と同じように、きっと人が苦しむと分かっていながら、それを手をこまねいて見ているということができない人種なのだろう。そういう奴だから、こんなに慌てて自分を止めようとしてくれている。理屈抜きで、想うがままに。
けれど今回ばかりは、彼女の言うとおりに動くわけにはいかない。こればっかりは、自分が自分の脚で、踏破しなくてはいけないことだ。諦めてはいけないことだ。諦めたくないことだ。
例え勝機が万に一つでも。

億に一つでも。
兆でも。
京でも。
無数の彼方から、一つの物体を見つけ出すに等しくても。
それでも、止まることは許されない。許されてほしくはない。許されて良い訳がないのだ。帰還を渇望することを、夢を築く歩みを、止めてはいけないのだ。
それでは『アイツ』が死んだ意味がなくなってしまう。だから。

「……一つだけ、聞いても良いかな?」
今まで静観していた白髪の少女から、問いが投げかけられる。
目線を絶句するウサ耳の少女から外し、巧は振り向いた。
「おんしはどうしてそこまでして、命を賭けてまで元の世界へ戻りたいのだ?」
純粋な声だった。
打算も何も感じない、本当に疑問に思ったと感じる声だった。恐らく、理由を聞いているのではないと、巧にはなんとなくわかった。
その意志が分かっても、巧は面倒くさそうに表情を歪める。
「……それって、真面目に答えなくちゃいけないのか?」

無論だ。その意志を示すために、白夜叉は大きく頷く。
巧は鼻から息を吐くと、丁度山脈を回り終わってこちらへと向かってくるグリフォンを見つめながら、こう答えた。
「もし、俺が五年後まで生きていて、それでこの世界に残っていたら」
――――その時に答えてやるよ。
言い終えられるのと、少女に課された試練が乗り越えられたのは、ほぼ同時だった。
ゴール地点の到着と一緒に、グリフォンの背から滑り落ちた春日部耀が風を纏って浮上し、そのまま十六夜達の元へと降下していくという常識外の現象に見向きもせず、白髪の魔王はただ解答を反芻しながら、笑みを浮かべた。
実を言うと、白夜叉の力だけでも彼を送り帰すことは可能である。現在の力であってもだ。
だが神格を得て力を抑制しているのは事実だし、一人の〝階層支配者〟として、理由も分からない輩を、仏門に無許可で送り帰すわけにもいかないという理由もあった。黒ウサギには悪いが、最初はそう言うつもりであった。
だが気が変わった。
目の前の男が、自身の命を賭けてまで帰ろうと言う気概を見せたことで、少しだけ太陽と白夜の星霊は、乾巧に興味を抱いた。なればこそ、白夜叉はもう少しだけ巧を観察

することにした。
その時になって、巧が帰るに相応しい男であるかどうかを知るために。
――――面白い。ならばその時まで、しっかりと生き延びてもらわねばな。

■　■　■　■　■　■　■　■

納得していない黒ウサギを適当にあしらい、半ば無理やりに話を終わらせた巧達は、飛鳥達の元へと戻る。
そこには丁度試練を終えた耀と、彼女と会話する十六夜の姿があった。
「やっぱりな、お前のギフトって、他の生き物の特性を手に入れる類だったんだな」
薄い笑みを浮かべる十六夜。近寄った三毛猫を抱き上げた耀は、少し不貞腐れたように瞳に影を落とした。
「違う。これは友達になった証。でも、いつから分かってたの？」
「ただの推測だ。黒ウサギと会ったときに『風上に立たれたらわかる』って言ってただろ？　そんな芸当は人間にはできない、だから春日部のギフトは他種の生物とコミュニケーションがとれるわけじゃなく、他種のギフトをなんらかの形で手に入れるものなんじゃないかと推測したわけだ。まぁ、あの速度に耐えられる生物は地球上にはいないか

らな。……それだけじゃなさそうだけどな」
意味深な語尾を後ろに付ける。同時に、パチパチと乾いた音が響いた。
柏手を叩いた白夜叉は、さぞ良い物が見れたと顔で語りながら笑う。
「いやはや、大したものだ。このゲームはおんしの勝ちだの……ところで、そのギフトは先天的なものか？」
「違う。父さんに貰った木彫りのおかげ」
「木彫り？」
頷くと耀は、首から下げたペンダント状の木彫り細工を取り出して、皆に見せた。
少しだけ興味だけが湧いた巧も、遠巻きから見てみたものの、そこに書かれた幾学の模様を見ても何から何まで分からずじまいだったので、興味が失せた。
「ふむ……詳しいことは分からんが、これは円形の樹形樹だの。生物の進化の過程などを表しておる。これのおかげでそこの娘は異種族と言葉を交わし、友になった種からギフトを貰えるということか。しかしこれ以上詳しいことを知りたいのであれば、上層の鑑定士に頼むしかないな」
「え？　今日は鑑定をお願いしに来たのですけど？」
ゲッ、と苦々しい声が漏れた。
時を同じくして、巧の肩が僅かに震える。最初に懸念していたことが今まさに、起き

ようとしていた。

「よ、よりにもよって鑑定か。専門外どころか無関係もいいところなのだか……」

どうしたものかと頭を捻る白髪の少女。暫く唸ると、突発的に妙案が浮かんだとばかりにニヤリと笑った。

「……ふむ、そうだの。なんにせよ〝主催者〟として、星霊の端くれとして、試練をクリアしたおんしらには〝恩恵（ギフト）〟を与えねばならん。これはコミュニティ復興の前祝いとして受け取ってくれ」

白夜叉が二回ほど柏手を打つ。刹那、巧達の眼前に光り輝くカードが顕現する。

そこにはそれぞれの名と、『何か』の名を示す名称が刻まれていた。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜

〝正体不明（コード・アンノウン）〟

ワインレッドのカードに久遠飛鳥

〝威光（いこう）〟

パールエメラルドのカードに春日部耀

〝生命の目録（ゲノム・ツリー）〟　〝ノーフォーマー〟

モイストシルバーのカードに乾巧

〝死せる餓狼の使徒（ウルフ・オルフェノク）〟

ふざけてんのか!?　この変なカードは！

反射的に叫びそう衝動を寸での所で飲み込み、双眸を開眼することで抑制する。動きが制限されたのは、それほどの衝撃だったということだろう。

まさか人の知られたくない正体を、これでもかというほどデカデカと明かしてくれるとは。相当ご親切なカードらしい。

内心憤怒に染まる巧の気持ちも素知らぬ黒ウサギは、現れたカードを見て興奮の色で表情を染めた。

「ギフトカード！」

「お中元？」

「お歳暮？」

「お年玉？」

「ち、違います！　このギフトカードは顕現しているギフトを収納できる超高価なカードですよ！　耀さんの〝生命の目録（ゲノム・ツリー）〟だって収容可能で、それも好きな時に取り出せる超素敵なギフトなんです！」

「正式名称を〝ラプラスの紙片〟と言っての、即ち全知の一端だ。そこに刻まれるギフトネームとはおんしらの魂と繋がった〝恩恵（ギフト）〟の名。鑑定はできずともそれを見れば

大体のギフトの正体がわかるというもの」
何が全知だと、巧は内心で吐き捨てた。他人様の隠し事まで知って何が楽しいのか。思わず、カードを持つ手に力が入る。
「へえ？　じゃあ俺のはレアケースなわけだ」
「何？」
十六夜の不可解な言葉を聞いて、彼の手元を覗き込む白夜叉を、理不尽と分かりながらも巧は睨まずにはいられなかった。こんな余計な物を寄こしてくれたのだから。
しかし文句を言っても、更に不利益を被るのはこちら側なので、巧はどうしようもなくため息をつく。
「ちなみに巧さんは、どんなギフトをお持ちなんですか？」
「――――ッ!!?」
その時、どこから湧いて出たのか、ひょこりと至近距離に顔を出した黒ウサギに、一瞬とはいえ巧は心臓が止まったのではないかというほどの驚愕を覚えた。
冗談抜きに一度呼吸を完全に停止して、ほぼ反射的に彼女から後ずさる。同時に、ギフトネームを見られたのではないかという疑念が胸中で渦を巻いた。バクバクとうるさいほどになる心臓音を聞きながら、巧は隠せぬ動揺を声に乗せる。
「……いッ、いきなり人の真横に顔出してんじゃねえよッ」

「むっ、なんですかそれ。人をお化けみたいに。別にいいじゃないですか。それよりも、巧さんのギフトはどんなのです?」
少しばかり頬を膨張させて、文句を垂れる黒ウサギ。彼女から眼を反らしながら、巧はさり気ない動作でカードをポケットにしまった。
「誰がお前なんかに見せるかよ」
「えー、別にいいじゃないですか。減る物ではありませんし。私気になりますっ」
「嫌だね」
そう言わずに見せてくださいよーっ。
閲覧を求める黒ウサギをあしらって、巧は耳に小指を突っ込みながら距離を取った。
「さて、そろそろお開きにしようかの」
巧と黒ウサギの耳に、白夜叉の言葉が滑り込む。程なくして、二回ほど柏手を叩く音が周囲に反響した。
刹那、視界は秒を跨がずして暗転し、巧達の体は数分前に見た和室へと回帰する。

Community with No name

吹き抜ける風。舞う砂塵。朽ち果て、音を立てて表皮が剥がれる大地。
極めつけには、色あせた建造物らしき物質の群れ。
白夜叉に見送られ、いざ〝ノーネーム〟本拠へと行かんとする異邦人達の眼前には、そのような光景が彼方にまで広がっていた。
「これが、我々のコミュニティの現状です。魔王のギフトゲームのあった約三年前に、名も旗も奪われ、見せしめとしてこのような爪跡を残されました」
へらへらとした表情を一転、硬質化させる十六夜。言葉が見つからず、ただただ唖然とする他ない巧や飛鳥、そして耀。
それぞれの反応を見せる彼らに、極力感情を押し殺し、どこか無理を押し通した様な黒ウサギの言葉が紡がれる。
目の前の地獄に引き込まれながら、巧は自身の耳を疑った。
――これが三年前だって？　たったの三年前に引き起こされたってのか？
明らかに莫大な時間経過……少なくとも、数十年と言う二桁の数字によって引き起こされたであろう眼前は、三年という一桁の単位によって発生したという。それも、何者

かの故意によるもので。
　まさしくもって自然災害にしか見えぬ人智を超えたこれらを、その意志一つで引き起こすことのできる何者か。それが彼らの仇敵なのだと認識すると共に、巧は内心戦慄すら覚えた。
「ハッ、そいつは面白いな。こんな数百年単位で、しかも自然崩壊したようにしか思えねえ荒れ地が、たったの三年前に引き起こされたってのは。……ああ、そいつは飛びっきり面白いぜ」
　頬を伝う液体を拭いもせず、獣のような笑みを形作る十六夜は、その者への羨望にも似たかってないまでの期待を抱く。
　忘我の淵から帰還した飛鳥と耀は、砂に埋もれた白地の街路や、錆に蝕まれて折れ曲った、要所要所に見られる鉄筋や針金に視線を回し、顔面を苦渋に歪めた。
「ベランダにあるティーセットやテーブルがそのままね。まるで、ある日突然人が消えてしまったように」
「……生き物の気配が全く感じられない。整備されずに放ってある人家なのに獣が全く寄って来ないなんて……」
　重々しく発せられたその言葉はは、今度こそ黒ウサギの表情を苦悶に染めた。彼女は目を空へと逸らしながら、

「……魔王とのギフトゲームは、それほどまでに未知の物だったのです。彼らは力を持つ人間が現れれば、児戯の如く気軽さでゲームに引き込み、その意志を砕き屈服させます。我々の仲間も皆コミュニティから、箱庭から……去って行きました」

発せられるに連れて、声量は悉く小さくなり、終いには聞き逃す恐れすらあるほどに矮小な物となった。

知らず、巧は眼を反らす。この箱庭に訪れて以来、彼女の気丈に振る舞う姿を多く見ていた分だけ、巧の瞳には、黒ウサギの姿は二倍にも三倍にも小さく映った。

それを、なんというか、あまり見ていたくなかった。巧自身、何故そう思うのかは理解に苦しむのだが。

「魔王、か。……ハッ、いいぜいいぞいいなァオイ。期待以上の相手ってことじゃねえか……！」

笑みを凄惨なものとする十六夜。瞳を爛々と輝かせる彼を、度し難いとでも言いたげに流し眼で見た巧は、更地の大地に視線を移した。

――けどコイツらは、こんな目に会わなくちゃいけない様なことをしたのか？

確かに完全な善人ってわけじゃねえが、ただ単に、ゲームで勝って一番儲かってたってだけだろ？

自身でも未だに深く理解していない感情を自覚しながら、乾巧は無意識的に右の拳を

握る。
顔をいつもよりもどこか険しいものにして、前に向かって歩き出した一行と共に、その一歩を踏み出した。

■　■　■　■　■　■　■　■

『よろしくお願いします!!!』
耳の中で暴れ回るほどの大声に、巧は耳を塞ぎたくなった。まるで拡長機で倍増したかのようだ。
やや鬱陶しげな瞳で、眼前に立ち並ぶ幼き二十人前後の少年少女達を見る。誰も彼も皆が十歳半ばを超えていないことは見ただけで分かる。何故か耳や尻尾を生やしているが、そこへツッコんだらキリがないので敢えてスル―する。
……マジでガキばっかだったんだな。つーかそれしかいねえ。
黒ウサギが臆面もなく告げたことは、紛れもない事実だったことを巧は確信する。こればっかりは嘘であってほしかったが、現実は非常にも真実だった。

「ハハッ、元気がいいじゃねえか」
「そ、そうね」
「……、」
元気良すぎだろ。どんだけ有り余ってんだよ。
何とも言えない表情を浮かべる飛鳥や耀とは違い、快活な笑い声を上げる十六夜に内心イチャモンを付ける。別に元気な子供が嫌い、というわけでもないのだが、ただ単に今は疲れていたので、彼らの輝かしい表情がまぶしかった。
尤も、大前提としてこの無愛想な塊の男に、子供が寄り付いた経験は無いに等しいのだが。
「さて、自己紹介も終わったことですし！　それでは水樹を植えましょうか！　十六夜さん、ギフトカードから出してくれません？」
「あいよ」
仕切り直すように両手を打ち鳴らす黒ウサギに、十六夜がコバルトブルーのカードから取り出した水樹を手渡した。受け取った彼女が踏みつける錆ついた道を見て、巧は双眸を細めた。流れるように視線を水路へと移す。
長年水が通っておらず、乾いた骨格だけを残された湖ほどもある広大な面積。先ほど子供たちが掃除していたと言っていたが、それでも焼け石に水と言うべきか、砂利を取

り除くことは叶わず、所々がひび割れそこへと汚らしい砂利が溜まっていた。
こんだけデカイ水路を、たったこれだけの人数でやってんのか？　無理があんだろ。
泥だらけの子供達を見る。モップやバケツを手に持つ彼らは、今か今かと水樹から溢れ出た水が、自身達のコミュニティの水路を満たす様を待ちわびていた。その瞳は、どこか希望にも満ちている。どう見たところで悲壮感や疲労感は感じられない。
「それでは行きます！」
ふと、黒ウサギの声を聞いた。
どうやら作業が終了したのか、彼女は台座に根を張らせた苗の布を解き、底に張っていた大量の水を流す。瞬く間に激流となったそれらは開け放たれた水門を潜り抜け、一直線に屋敷へと続く水路を満たした。小さな苗から放たれたとは思えない水量である。
「凄い！　これなら生活以外にも使えるかも……！」
ジンの頬を綻ばせた呟きが耳に届く。見れば子供たちも似たような物で、全員が全員明るい表情で感情を前面へと押し出していた。水が手に入ったという事実だけで。
それで喜んでしまえるほどに、彼らの生活は凄惨なものだったという証明にもなった。十六夜が水樹を手に入れなければ、これを見ることはできなかっただろう。更に言えば、これからは十六夜達の活躍次第で、子供たちはどのような生活を強いられるかが決まってくる。ギフトゲームに勝てば、一つ上のランクの生活ができるかもしれない。

巧が手を貸せば、生活向上の可能性は尚のこと上がるかもしれない。
いつの間にか、そんなことを考えている自分に気付く。巧はハッとなって首を横に振った。

「……何考えてんだ」
そんなことは考えなくても良い。巧がいなくとも、十六夜達がいれば支障はないだろう。未だ箱庭世界の勝手は分からないが、少なくとも彼らが簡単に負ける姿は想像できない。巧が言うが、性格は癖がありすぎても実力は十二分にある。これよりも酷くなることはないだろう。故に、心配などないはずなのだ。
それなのに、何故か煮え切らない。
「……何だってんだよ、くそっ」
相反する感情を抱く自分に、思わず舌打ちする。手伝ったところで何になる。死に損ないの自分に何ができる。
そう割り切ってしまえれば簡単だったのに、それだけはどうしてもできない。何故かできない。心の底で、それを拒んでいる。
それはどこか、人間らしくないと拒んでいる。そのことが、少しだけ怖い。
「一体何なんだよ、くそったれ」

再び舌打ち。
答えの出ない自問自答を繰り返して、乾巧は上がり始めた月を見上げた。

■　■　■　■　■　■　■　■

辺りには既に、夜の帳が下り始めていた。
その夜には、何とも神秘的な十六夜の月が空へと昇り、薄暗い周囲を綺麗に照らしていく。
そんな見事な月夜の中、乾巧は本拠周辺の道を歩いていた。
月に照らされているとはいえ、まだまだ危険性がある夜道を危なげなく進んでいく。
夜目が聞く巧にとって、薄暗さは障害にはなり得ない。
足を運びながら、浮かべている仏頂面を更にぶすっと顰めた。
「……時間考えて動けっての」
誰に言うでもなく言葉を零す。巧がこうしているのも、当然ながら理由があった。
時間にして先刻ほど、彼は住居である屋敷の個室へと向かっていた。
黒ウサギ曰く、好きに選んで使ってくれて構わないとのことだったので、女性陣が一

足先に入浴している間に惰眠を貪ろうと思ってのことだった。風呂とかそういったことは後廻しにして、取りあえずはグータラして休みたかったのだ。

そう思った矢先に感じた、複数の匂い。

子供たち以外の……端的に言ってしまえば、成人の気配。加えて全員が男。

それはあり得ないことだった。〝ノーネーム〟は子供のみ。コミュニティにいないはずの大人が、しかもこんな廃れた本拠に侵入してくるなど、あまりに不自然である。

目的は不明。だからこそ、何をされるか分かった物ではない。

ここは〝ノーネーム〟であり、他のコミュニティからすれば敬意を払う必要性がない有象無象。つまりは『名無しなんだから、何をしても誰も困らないだろう』という考えがないことも限らない。ガルドが良い例である。

故に巧は泣く泣く、非常に泣く泣く、疲れた体に鞭打ってこうして夜の道に足を踏み入れているのである。

「……めんどくせェ」

唇を尖らせて愚痴る。

しかし、これも自身の寝床を守るため。心地のいい安眠を守るためだと内心で無理やりに言い聞かせ、真っ暗な夜道を危なげなく踏む。

――その刹那の激震。そして爆音。
靴底を地面につけると同時に感じた莫大な地の揺れと、耳を劈きかねない轟音に、思わず巧はよろめいた。
「……ッ!?」
ふらついた体を立て直しながら、莫大な焦燥を抱く。
明らかにただ事ではない、何か。そう、強大な力が暴発でもしなければ、このような揺れは起こり得ない。であれば、何かが起こったと考えるのが妥当だろう。それも、大きな何かが。
自身の中で燻ぶる焦りを押さえながら、巧は件の侵入者たちの匂いを追って駆ける。
いくらか走ったところ――黒ウサギ曰く、子供たちが寝静まる別館の前まで来たところで、乾巧はふと足をとめた。
理由は単純。
彼の眼前には、苦悶の呻きを漏らしながら大きく窪んだ地に伏すロープ姿の者たちと、それをつまらなそうに見下す逆廻十六夜の姿があったからだ。
「……何がどうなってやがる」
非常事態と思って駆けつけて来てみればこの有様。理解が事態の展開に付いていけていない。

十中八九、ロープ姿の集団が匂いの主たる侵入者たちなのだが、何が何をどうしてこうなったのか。何故十六夜がここにいるのか。

もはや困惑するしかなく、目の前の光景に少しの安堵と拍子抜けた感覚を覚える巧。

そんな彼の存在に気付いた十六夜が、意外そうな面持ちで振り返り、まるで待ち合わせの相手に呼び掛けるように話しかけてくる。

「よぉ、乾。こんなところで会うなんて奇遇だな」

「……俺は全然奇遇じゃないけどな」

「連れないねぇ。こんなに良い月が出てるってんだから、少しは愛想を振りまいてもいいんじゃねえの？」

楽しそうにケラケラと笑う十六夜に、巧は心底鬱陶しそうな表情を浮かべた。

……なんでまた、こんなメンドクセェ奴と。

正直な話、巧は十六夜のことが嫌いだった。

いつも浮かべる軽薄な笑み。時に飛鳥でさえも可愛く見える過剰な自信。特に巧は、本心を掴ませない様な飄々としたあの態度が気に入らなかった。そういう奴は、総じてあまり良い奴ではないと思っている。無論、これは巧の偏見であるが。

――――俺には分かるんだよ。お前みたいな奴はな、腹の底で何考えてるか分かんねえんだ！

何時だか、巧が元の世界に居た時に『アイツ』に向かって言い放った言葉を思い出す。
あの時はカッとなっていたこともあったし、完全に口から出まかせだったのだが、今はなんとなく的を得ていたと過去の自分を褒めてやりたい。こういう奴ほど、腹の内に何かデカイ物を抱えていることが多いものだ。
特に、常軌を逸した異能を持っているのなら尚更。
「ど、どうしたんですか!?」
爆音を聞きつけてか、ジンが慌てた様子で別館から駆けだしてきた。
問いかけられた十六夜は依然として楽しそうな笑みを絶やさず、背後で痛みで蹲る影を親指で指差しながら
「侵入者みたいだぜ。大方〝フォレス・ガロ〟からの物騒なお使いじゃねえのか？なぁ？」
「……俺が知るかよ」
ぶっきらぼうに返しながらも、巧は内心でこの状況の顛末を理解し、納得する。
つまるところ、この集団は昼間のガルドの手先で、人質を取られている手前逆らえず、彼がいつものようにゲームに勝つための人質を調達するためにここへ忍びこんだところ、十六夜にまんまと見つかってああなった、というわけだろう。あの地震もその影響とみえる。

神様を素手で倒したというのだから、そんなことまで出来るのかもしれない。いや、きっと容易い事なのだ。

「な、なんという出鱈目な力……！　蛇神を倒したというのは本当のようだな……！」

「おうよ、これならば明日のガルドとのゲームも必ずや……！」

不意に、闇の中から声が飛んできた。

解せない単語に皆が振り返れば、先ほどまでただ呻くだけだった人影の内の数人が、ふらふらと立ちあがる。

覚束ない足取りでこちらへと歩み始めた彼らは、一定の距離まで近づいたかと思えば、そのロープを取って姿を晒した。その容姿に、思わず巧は眼を丸くする。

「耳と……爪？」

「何だお前ら。随分とファンシーな見た目してんだな」

「我々は人をベースに様々な〝獣〟のギフトを持つ者たち。しかし格が低いために、このような半端な変幻しかできないのだ」

何ともまあファンタジーな話だと巧は半ば呆れた。これでは、オルフェノクがそこらじゅうを姿を晒して歩いていても、誰も何も騒ぎ立てない、なんてこともあり得るかもしれない。本気でそう思えてしまう。

「――で？　アンタらはどうしてここに来たんだ？　子供たちでも攫いに来たのか？

一応理由だけは聞いてやるからさ。ほれ、話してみろよ」
笑いながらも、十六夜の瞳には鋭利な光が見え隠れしていた。
事と次第によってはただではおかないと、その体から吹き出る見えぬ何かが語っている。
途端に沈鬱そうに黙り込んだ彼らは、戸惑うように身内同士で目配せを繰り返し、やがて意を決したような顔つきを浮かべた。
「恥を忍んで頼む！　どうか魔王の傘下たる〝フォレス・ガロ〟を、完膚なきまでに叩き潰して頂けないだろうか!?」
「嫌だ」
間髪いれずに返答。驚愕を通り越して清々しささえ覚える十六夜の潔さに、その場の誰もが言葉を失った。
「どうせあれだろ？　お前らも人質取られて仕方なくーってクチだろ？　聞かれる前に言っとくが、その人質達はもうこの世にいねえから。はい、この話題はこれにて終了」
「――十六夜さんっ!!」
咎める様にジンが声を張り上げる。
しかし、十六夜は憮然としたまま少しも詫びた様子を見せず、つまらなそうに言葉を返した。

「何だ、気を使えってか？　だがな御チビ様、どうせ明日には分かっちまうことだし、それにそういうのが要らないも分かってる筈だぜ？　なんてったって、コイツらだって立派な加害者なんだから。正義の味方を気取るつもりはねえが、さすがにテメェの私怨に付き合うほどお人好しじゃねえよ」

「だからって……そんな言い方をしなくても！」

ジンと十六夜の口論を片手間ほどに聞きながら、巧は十六夜の言葉の意味を反芻する。

十六夜の言うことは、きっと正しいのだろう。人質を盾にされたとしても、そこから先の人質を攫ってきたのは他ならぬ彼らだ。彼らは自身の人質を救うためという大仰な大義名分の下に、ガルドに殺しの材料を提供していたということになる。

身内が人質に取られていたからといって、それを理由に他人を殺してもいいのか？　それが許されるのか？

結局のところは、これに尽きる。この理（ことわり）を、凄く不安定だけれども大事な理を、十六夜は言いたいのかもしれない。

とどのつまりは因果応報である。人殺しの肩棒を担いできた彼らが、今更誰かに自分の復讐を肩代わりしてほしいなどとは、虫が良すぎると言うことなのだろう。

――それでも、俺よりかはずっとマシだ。十分釈明の余地があるってもんだな。

「そ、それでは」
侵入者の一人が、縋るような瞳で巧へと声を掛ける。
服の裾からはみ出た大きな手が、傍から見ても分かるほどに震えていた。
「本当に……本当に、人質は……！」
どうか、嘘だと言ってくれ。
双眸が訴えかけるものは、巧には言わずとも分かった。
だからこそ迷う。このまま教えてもいいのか。教えることが許されるのか。
されど事実は揺るぎないもの。時間は戻らない。死に損うことすらできなかった彼らの人質は、もうどこにもいない。
故に巧は下唇を噛み、重い上顎を上げて舌を回し、事実を述べる。
「……ああ。人質は、とっくに死んでる」
侵入者たちの表情が、劇的に変化した。
皆顔から血の気が引き、真っ青になって項垂れる。
後に泣きだす者。悲しみが一周廻って笑いだす者。ただ項垂れる者。そして後悔する者。様々な絶望の形があった。
その様を見ていた巧の拳が、無意識的に握られる。
どう見たところで彼らの自業自得。非情な言い方をすれば、安っぽい悲劇である。

それでも、何も思わないなどとすることは、どうしても巧にはできない。
「――お前ら、〝フォレス・ガロ〟が……ガルドが憎いか？」
重圧感漂うその空気を、十六夜の声が引き裂く。
ふと視線を回せば、彼は三日月の様に口を裂いて笑っていた。
その笑みに、とてつもない不信感を抱く巧。
……何考えてやがる。
「な、何を……」
「ガルドが憎いか？　叩き潰されて欲しいか？　木っ端微塵に粉砕し尽くされるよう願うか？　どうなんだ？」
ＹＥＳかＮＯか。それだけしか訊いていない。そう思わせるだけの凄みを以て問う。
侵入者達は、ざらついた地面を見ながら、着いた手に力を込めて返答。
「……当たり前だ。あの魔王がいなければ、魔王さえいなければッ!!　俺達の人質は……！」
「だが、お前達には抗う力はない。そうだろう？」
そうだ。
消え入るような声で、言葉が返される。下唇を噛んで、己の中の激情を押さえる侵入者たち。

「……ガルドは、第六六六外門に本拠を構える魔王の傘下。奴は第三桁の魔王から力を与えられているが故に、我々とは文字通りに格が違う。仮に勝てたとしても、万が一に魔王に目を付けられればただでは済まん」

「――その問題を打破するコミュニティがあるとしたら？」

再度十六夜に視線が集中する。

それでもやはり少年は笑っていた。

楽しそうに、嬉しそうに。

「どういう、意味だ？」

「なんだ、分からないのか？　なら分かりやすく言ってやる」

十六夜は、隣に茫然と立つジンの肩を抱き寄せながら、

「ここに居るジン坊ちゃんが、魔王を倒すコミュニティを作ると言っているんだ」

「なっ!?」

「ハアッ!?」

当然ながら、十六夜の奇行に皆があまりの驚愕で思考を麻痺させた。

巧に至っては、如何にも素っ頓狂な声を上げてしまう始末。

――何イカれたこと抜かしてやがんだ!?　本当に頭の中がお釈迦になってんじゃねえのか!?

彼の心情はこれらに尽きる。十六夜の発言があまりにも酔狂に過ぎた。

何せ、彼の言葉を直訳すると『このジン坊ちゃんが、箱庭全ての魔王を打倒するためのコミュニティを作ります』ということになってしまうではないか。冗談ではない。

「魔王を倒すコミュニティ？　そ、それは一体……」

「そのままの意味だ。俺達は魔王のコミュニティ、その傘下を含め全てのコミュニティを魔王の脅威から守る。そして守られるコミュニティは口を揃えてこう言ってくれ。〝押し売り・勧誘・魔王関係御断り。まずはジン＝ラッセルの元に問い合わせください〟」

「――おいっ！」

まるで演説でも語るかのように饒舌に話す十六夜の口を、巧は彼の胸倉を乱雑に掴みあげることでようやく留める。このままでは、この男は延々と訳のわからない嘘八百までも口にしてしまうかもしれない。

「た、巧さん!?」

外野が唖然とする中、唯一我に返ったジンだけが慌てて仲裁に入った。しかし頭に血が上っている巧は袖にもせず、ギリギリと音を上げるほどに胸倉を掴みあげる手に力を込めながら、力強い眼力を以てして睥睨する。

「テメェ……ふざけんなよ！　それじゃあ昼間と言ってることがちがうじゃ――」

激情に任せて奔っていた叫びは、奇妙なところで途切れてしまった。
後少しで、額と額がぶつかり合うところまで接近した金髪の少年は、まるで悪戯を考えついた様な子供の様な笑顔を浮かべていた。そして驚くほど静かな動きで、己の唇に人差し指を添える。
あまりにもその行動が穏やかだったので、思わず戸惑いを感じて一瞬動きを止めた巧に、十六夜は畳み掛けるが如く小さく、それでいてこれまでにないほどの真摯な声で囁く。
「……落ち着けよ。別に約束を破ろうってわけじゃねえ。これでも俺なりの考えがあるんだ」
「……考えだ？」
反射的に声量を合わせる巧。一応訊くだけ訊いてみようという態度が感じられたのか、十六夜は更に笑みを深くして頷いた。
「ああ。お前との約束も破らず、それでいて〝ノーネーム〟の目標にも近付けて、更にお前の目的への近道にも成るとびっきりに素敵な考えがな。……後で説明してやるから、此処は黙っといてくれや」
「……、」
一瞬。

訝しげな目線を十六夜に向ける。そのとびっきりに素敵な考えとやらを信じても良いのか、少しだけ戸惑う。

認めたくはないが、十六夜は凄まじく頭が回る。そういった策略事が得意だということは、これまでの行動からその片鱗を感じさせた。

……気にいらねえが、賭けるしかねえか。

どのみち他の手段は知りようもない。神仏が溢れかえるこの箱庭で、この〝ノーネーム〟以外でやっていく他帰る手段はないに等しい。

幾許かの逡巡の後、巧は十六夜の胸倉を掴みあげていた手を離した。

皺くちゃになった学生服を軽く整えながら、十六夜は一つ咳払いをして、今も呆気に取られている向き直る。

「――そういうわけだ。お前達、もう魔王の恐怖に怯える必要はないぞ。止まない雨はない。去ることのない嵐なんてないんだ。虐げられる弱者のために、このジン＝ラッセルが立ちあがったんだからな！」

「う」

嘘でしょう!?

ジンが言うよりも速く、十六夜は仮にも首領である彼の口を乱暴に塞ぐ。

まるで演説の様な彼の語りを聞いた侵入者たちは、瞳に僅かな光明を指して恐る恐る

問うた。
「そ、それは本当なのか……？　冗談とかじゃ」
「こんな状況で冗談なんか誰が言うか。さあ、速く仲間達の元へ帰れ！　そして伝えろ！　ジン＝ラッセル（救世主）が現れたと！　勇気ある少年が打倒魔王を掲げて立ちあがったと！　存分に言いふらせ！」
次から次へと、白々しいことを……。
正義の味方を気取るつもりはないと言ったのは、一体どこの誰だったか。策のためとはいえ、一瞬で掌を返した十六夜の迫真の演技に巧はもはや呆れるしかない。
ともあれ、少年の言葉で再起するまでに復活した侵入者たちは、皆が希望に満ち満ちた表情を浮かべて勢いよく立ちあがる。
「わ、分かった！　明日のゲームは頑張ってくれ、ジン坊ちゃん！」
「……っ！　……っ!!」
ジタバタと十六夜の腕でもがくジンが瞳で必死に訴える。だが悲しいかな、侵入者たちは興奮状態で誰ひとり気付いてはいない。
先ほどの沈鬱そうな雰囲気はどこへやら、彼らは嬉々とした面持ちでその場を足早に去って行った。
ようやく拘束を解かれるも時すでに遅く、茫然自失となりながら膝を追って侵入者達

を見送ることしかできないジン少年の姿に、乾巧はほんの少し、欠片ほどの同情を感じるのだった。